

高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 高 浜 II 遺 跡

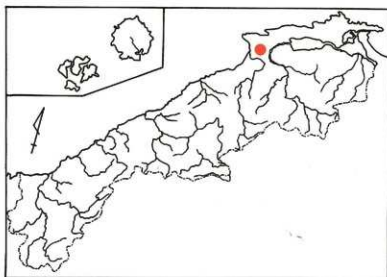


1999年3月

出雲市教育委員会

高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 高 浜 II 遺 跡



高浜 II 遺跡位置図

1999年3月

出雲市教育委員会

## はじめに

高浜Ⅱ遺跡の存在する北山山麓は市内の集落遺跡分布地域のなかでも早くから注目される地域の一つです。

このたび、高浜地区ふるさと農道整備事業実施にあたり、高浜Ⅱ遺跡の一部を発掘調査致しました。その結果、奈良時代及び江戸時代を中心とする遺構、遺物を検出し、この地域における人々の暮らしを知る貴重な資料を得ることができました。特に大量に出土した奈良時代の遺物は出雲平野における当該時期の遺物資料を充実させることとなり、貴重な成果と言えます。

これらの成果が、郷土の歴史をひもとく鍵として、広く活用されることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導ご協力賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成11年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

## 例 言

1. 本書は、出雲市農林振興課の委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成9年度に実施した高浜Ⅱ遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。  
平成9年(1997)4月14日～平成9年(1997)6月19日
3. 発掘調査を行なった地番は次のとおりである。  
島根県出雲市平野町1003番地ほか
4. 調査は次の組織で行なった。  
〔調査指導〕 岩橋 孝典(島根県教育庁文化財課主事)  
〔調査主体〕 出雲市教育委員会  
〔事務局〕 後藤 政司(文化振興課長)  
〔調査員〕 藤永 照隆(文化振興課主事)  
〔調査補助員〕 石橋 弥生(文化振興課臨時職員)  
〔発掘作業〕 吾郷 要子、奥田 広信、片山 修、鎌田 静子、鎌田 操、富田 勉、  
鍋野 良雄、浜村 富江、米山 清司、浜村 伸幸  
〔遺物整理作等〕 飯國 陽子、糸賀 伸文、今岡 司郎、遠藤 恭子、鬼村奈津子、  
松山 智弘、三成 留美、羽木 伸幸  
〔調査協力〕 西尾 克己、森岡 正司
5. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。  
SD……溝状遺構 SK……土壌 P……ピット SX……その他の遺構
6. 本書で使用した挿図の方位は、調査時の磁北であり、レベルは海拔である。
7. 本書に報告した資料は、出雲市教育委員会において保管している。
8. 本書の執筆、編集は藤永が行なった。

# 本文目次

はじめに  
例言  
本文目次  
挿入目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 調査の経緯 .....	4
第3章 調査の概要 .....	6
第4章 遺構と遺物 .....	5
(I) 近世の遺構と遺物 .....	12
(II) 古代の遺構と遺物 .....	21
第5章 ま と め .....	47

## 挿 図 目 次

第1図	高浜Ⅱ遺跡周辺遺跡分布図	2	第25図	その他のビット遺物実測図	26
第2図	山雲平野の主要遺跡分布図	3	第26図	遺構外遺物出土状況	27
第3図	調査区周辺実測図	4	第27図	遺構外遺物実測図(須恵器1)	28
第4図	近世遺構配置図	5~7	第28図	遺構外遺物実測図(須恵器2)	29
第5図	古代遺構配置図	8~9	第29図	遺構外遺物実測図(須恵器3)	30
第6図	調査区土層断面図	10~11	第30図	遺構外遺物実測図(須恵器4)	31
第7図	杭列実測図	12	第31図	遺構外遺物実測図(須恵器5)	32
第8図	S D 0 1 実測図	13	第32図	遺構外遺物実測図(須恵器6)	33
第9図	S D 0 2 遺物実測図	14	第33図	遺構外遺物実測図(須恵器7)	34
第10図	S X 0 1 実測図	15	第34図	遺構外遺物実測図(須恵器8)	34
第11図	S X 0 1 蓋板上層出土遺物実測図	16	第35図	遺構外遺物実測図(須恵器9)	35
第12図	S X 0 1 底板上層出土遺物実測図	17	第36図	遺構外遺物実測図(須恵器10)	36
第13図	S X 0 2 実測図	18	第37図	遺構外遺物実測図(須恵器11)	37
第14図	S X 0 2 遺物実測図	18	第38図	遺構外遺物実測図(須恵器12)	38
第15図	遺構外遺物実測図(近世)	19	第39図	遺構外遺物実測図(土師器1)	39
第16図	区画溝周辺遺構実測図	21	第40図	遺構外遺物実測図(土師器2)	41
第17図	S D 0 2 遺物実測図	22	第41図	遺構外遺物実測図(土師器3)	42
第18図	区画溝周辺遺構遺物実測図	24	第42図	遺構外遺物実測図(土師器4)	43
第19図	S D 0 5 実測図	24	第43図	遺構外遺物実測図(土師器5)	44
第20図	S D 0 6 実測図	25	第44図	遺構外遺物実測図(土師器6)	45
第21図	S D 0 7 実測図	25	第45図	遺構外遺物実測図(土師器7)	46
第22図	S D 0 6 遺物実測図	25	第46図	高浜Ⅱ遺跡と律令時代の 周辺文字資料出土遺跡	48
第23図	S D 0 7 遺物実測図	25			
第24図	S K 0 2 実測図	26			

## 第1章 位置と環境

高浜Ⅱ遺跡は出雲市街地の北西約4kmに所在する。出雲平野の北端、北山山麓の南側を東から西に流れる高浜川（山持川より続く河川）の南方に広がっている遺跡で、奈良時代頃には西流していた斐伊川によって生成された旧自然堤防上に占地している。

この地域周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が密集しており、高浜Ⅱ遺跡の西には高浜川遺跡、東には里方八石原遺跡、南東には高浜Ⅰ遺跡などが存在する。

**縄文時代** 縄文時代前期末から中期にかけては縄文海進の影響で出雲平野の大部分が海域であり、集落が本格的に営まれるようになるのは海退の進んだ縄文時代晩期頃からであった。主な集落遺跡には、早期末の上長浜貝塚、菱根遺跡、縄文時代後・晩期の三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡、後谷遺跡、原山遺跡などが挙げられる。ほとんどの集落が平野の縁辺部に営まれていたようであるが、平野中心部の矢野遺跡ですでに当該期の遺物が確認される。

**弥生時代** 弥生時代前期には縄文時代後・晩期の状況と大きな変化はなかったようであるが、弥生時代中期から後期にかけては矢野遺跡周辺をはじめ、天神遺跡や古志本郷遺跡、下古志遺跡（正蓮寺周辺遺跡）、山持川遺跡など、平野部各地で集落が急増する。この頃までには斐伊川・神門川の沖積作用が進み、平野部各地に人の生活可能な微高地がかなり広がっていたと考えられる。

また、弥生時代後期後半になると、出雲平野を見下ろす西谷丘陵上に四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が築造された。中には長辺40mを超える大型のものも含まれ、各集落を統率する有力首長がこの頃までに出現していたと考えられる。

**古墳時代** 古墳時代前期から中期にかけて、矢野遺跡や天神遺跡、古志本郷遺跡など、平地に営まれた集落の多くが衰退していった。集落衰退の原因は現段階では不明である。当時の権力の象徴であった古墳もこの時期のものはあまり知られていない。現在のところ大寺古墳（52m：前方後円墳）山地古墳（20m：円墳）北光寺古墳（約50m：前方後円墳）が確認されている。

古墳時代後期になると、低地の集落にも人々が戻り初め、古墳も出雲地方最大級の古墳である大念寺古墳（約100m：前方後円墳）をはじめ、有力古墳や横穴墓が平野縁辺部に数多く分布するようになった。

**律令時代** 律令時代には出雲平野は当時西流していた出雲大川（現在の斐伊川）を境に神門郡と出雲郡に行政区画が分かれていた。平野の西には神門水海（現在の神西湖）が、東には入海（現在の宍道湖）が未だ現在より遙に大きく広がっていたようである。当時も平野部各地で遺跡が確認され、中でも墨書土器などの文字資料を出土する古志本郷遺跡、天神遺跡、小山遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、後谷遺跡などが注目される。古志本郷遺跡は神門郡家跡に、後谷遺跡は出雲郡家跡に比定されている。

また、この時期になると神門寺廃寺、天寺平廃寺などの氏寺が建造されるとともに小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓、光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、いち早く仏教文化が取り

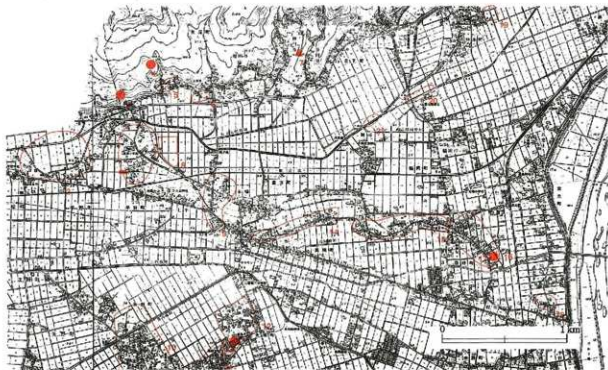
入れられていたことが窺える。

また、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には、出雲大川下流域の様子について、「土地豊かに沃えて土穀・桑・稔り欵技に、百姓膏腴の園なり。」と記載されており、当時の出雲平野が農業に適した肥沃地であったようである。

**中世** 中世の遺跡としては集落に矢野遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などが知られるほか、中世武士の墓として伝えられる荻籽古墓などが確認される。また、武士による戦の多かった当時の様子を窺わせるように、出雲平野南側を中心として半防城跡、大井谷城跡をはじめとして十数箇所の山城が確認されている。

**近世** 近世の頃には度重なる斐伊川の氾濫によって、神門水海はしだいに堆積されており、また西流していた斐伊川は、寛永16年(1936年)の大洪水以後穴道湖へ流路を変えた。そして17世紀以降中国山地で発達したタタラ製鉄法に伴う鉄穴流しは、多量の土砂を斐伊川へもたらし、穴道湖西部を急速に平野化させていった。

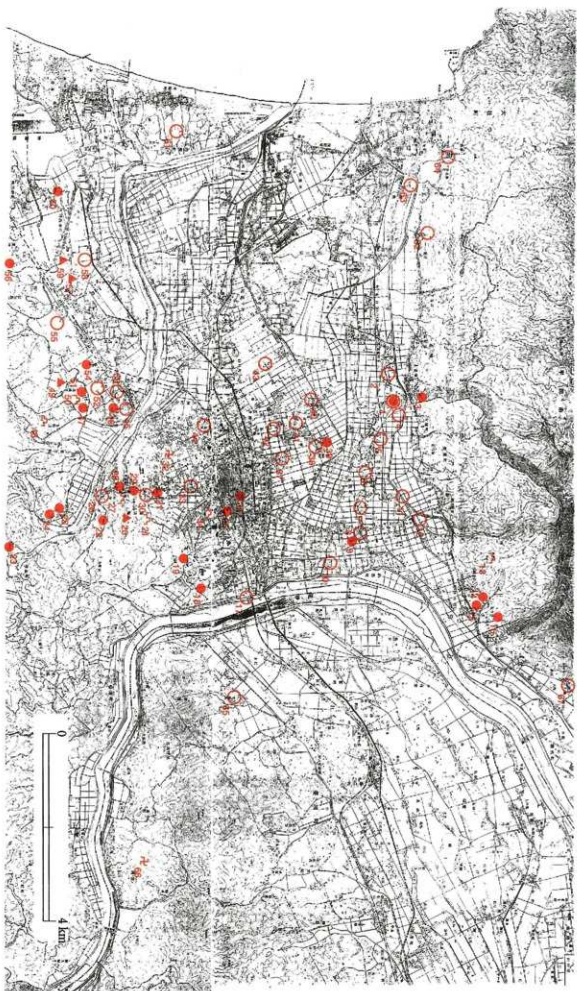
近世の遺構・遺物は、平野部各地の遺跡で確認される。中でも天神遺跡においては、石敷や道伏遺構、畝状遺構を検出したほか墨書木札なども確認されており、近世の暮らしを窺える貴重な資料となっている。



第1図 高浜Ⅱ遺跡周辺遺跡分布図

1. 高浜Ⅱ遺跡
2. 高浜川遺跡
3. 石臼古墳
4. 大前山古墳
5. 熊見谷遺跡
6. 前口遺跡
7. 矢尾横穴墓群
8. 里方八石原遺跡
9. 高浜Ⅰ遺跡
10. 矢野遺跡
11. 小山遺跡
12. 大塚遺跡
13. 大塚古墳
14. 高岡遺跡
15. 稲岡遺跡
16. 荻籽Ⅱ遺跡
17. 荻籽古墓
18. 荻籽Ⅰ遺跡
19. 能善寺東遺跡
20. 山持川川岸遺跡
21. 里方別所遺跡





第2圖 出雲平野の主要遺跡分布図

1. 高浜I遺跡 2. 高浜II遺跡 3. 石臼古墳 4. 園方八石田遺跡 5. 高浜I遺跡 6. 高浜遺跡 7. 朝四遺跡 8. 荻野II遺跡 9. 荻野古墓 10. 荻野I遺跡
11. 園方別所遺跡 12. 山手山川原遺跡 13. 上坂古墳 14. 荻林寺山古墳群 15. 養福山古墳群 16. 大寺古墳 17. 斐伊川原遺跡 18. 西谷遺跡 19. 菅沢古墳
20. 上坂古墳 21. 大井谷地跡 22. 光明寺古墳群 23. 朝山古墓 24. 小坂古墳 25. 川山古墳 26. 大寺寺古墳 27. 津谷遺跡 28. 馬子古墳遺跡 29. 山古墳
30. 飯山遺跡 31. 上坂古墳山古墳 32. 神門寺境内遺跡 33. 舟田遺跡 34. 荻野古墳群 35. 大寺寺古墳 36. 飯山古墳 37. 牧れ山古墳 38. 養福山古墳
40. 矢野遺跡 41. 小山遺跡 42. 養福遺跡 43. 白持野村遺跡 44. 天神古墳 45. 古志本遺跡 46. 大塚古墳 47. 牧れ山古墳 48. 養福山古墳
50. 浄土寺山遺跡 51. 妙蓮寺山古墳 52. 田原遺跡 53. 下五石遺跡 54. 聖徳古墳 49. 古志本遺跡 49. 養福山古墳 50. 浄土寺山遺跡
55. 浄土寺山遺跡 56. 浄土寺山遺跡 57. 福知寺境内遺跡 58. 知井寺多聞院遺跡 59. 知井寺多聞院遺跡 60. 山古墳 61. 上坂古墳 62. 養福遺跡 63. 原山遺跡 64. 出雲大社境内遺跡 65. 鏡谷遺跡 66. 天神古墳 67. 中村遺跡

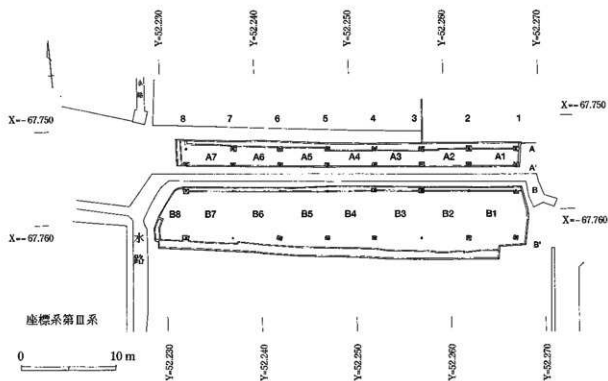
## 第2章 調査の経緯

高浜Ⅱ遺跡は平成4年度に出雲市教育委員会が実施した国庫補助事業に伴う出雲市内遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。ただし、そのすぐ西方に存在する高浜川遺跡については、古くから弥生時代から奈良時代頃の遺跡であるということが知られていた。

平成7年(1995)11月、出雲市農林課より高浜地区ふるさと農道整備事業予定地における埋蔵文化財の確認調査について依頼を受けた。当該事業予定地は一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である高浜Ⅱ遺跡の範囲に含まれている可能性があったため、同年12月26日、事業予定地内に7箇所のトレンチを設け、試掘調査を実施した。その結果西側2箇所のトレンチにおいて須恵器・土師器が発見され、その内1箇所では遺構も確認された。その結果を踏まえ、出雲市教育委員会と出雲市農林振興課(平成8年度より農林課から農林振興課となる)が協議を重ねた結果、平成9年(1997)4月より事業予定地内の遺跡確認範囲約300㎡について発掘調査を実施することで合意した。

現地発掘調査は平成9年(1997)4月14日より着手し、水の処理に悩まされながらも同年6月19日に終了した。

調査の結果近世の棺桶、溝状遺構、奈良時代の溝状遺構、ピットなどの遺構を検出したほか、須恵器、土師器をはじめとする多量の遺物、約40コンテナ分が出土した。



第3図 調査区周辺実測図

### 第3章 調査の概要

高浜Ⅱ遺跡の発掘調査が実施されるのは、今回が初めてであるが、この遺跡と隣り合って東に存在する里方八石原遺跡については、高浜小学校移転改築に伴って平成4年(1992)にすでに発掘調査が実施されている。里方八石原遺跡の調査では、近世以前の遺構は確認できなかったものの、奈良時代の須恵器、土師器などが数多く出土している。

今回の調査地は、平成4年度里方八石原遺跡調査地の西南西約350mに位置する。調査区の中に水路が東西に走っていたため、水路を挟んで南側に南北約7m×東西約35mの調査区を、北側に南北約2m×東西約35mの調査区を設定した。調査面積は計約315㎡である。

調査前の状況は田畑であり、現在の地表面の標高は約3.3mであった。調査は作業を省略化するため重機による表土掘削を行ない、その後手掘りによって徐々に掘削しながら調査を進めた。

#### <土層堆積状況>

層序は、基本的に上層から表土・盛土、黄褐色粘土、暗灰黄色土、褐灰色土、灰色粗砂層の順になっている。

表土からは近現代、近世、奈良時代の遺物が混在して少量出土しており、その下の黄褐色粘質土上面が近世の遺構面となっている。

黄褐色粘土、暗灰黄色土からは奈良時代のものを中心に大量の土器が出土しており、その下の褐灰色土上面が奈良時代～平安時代初期頃の遺構面となっている。暗褐灰色細砂層にはその上面にやや粗いぶい黄褐色の砂が薄く堆積する部分(B5・6, 7, 8Gr)があり、この部分に遺構が多く確認された。また、これより下層においては、遺構・遺物ともに全く確認されなかった。

#### <遺 構>

##### ・近世遺構

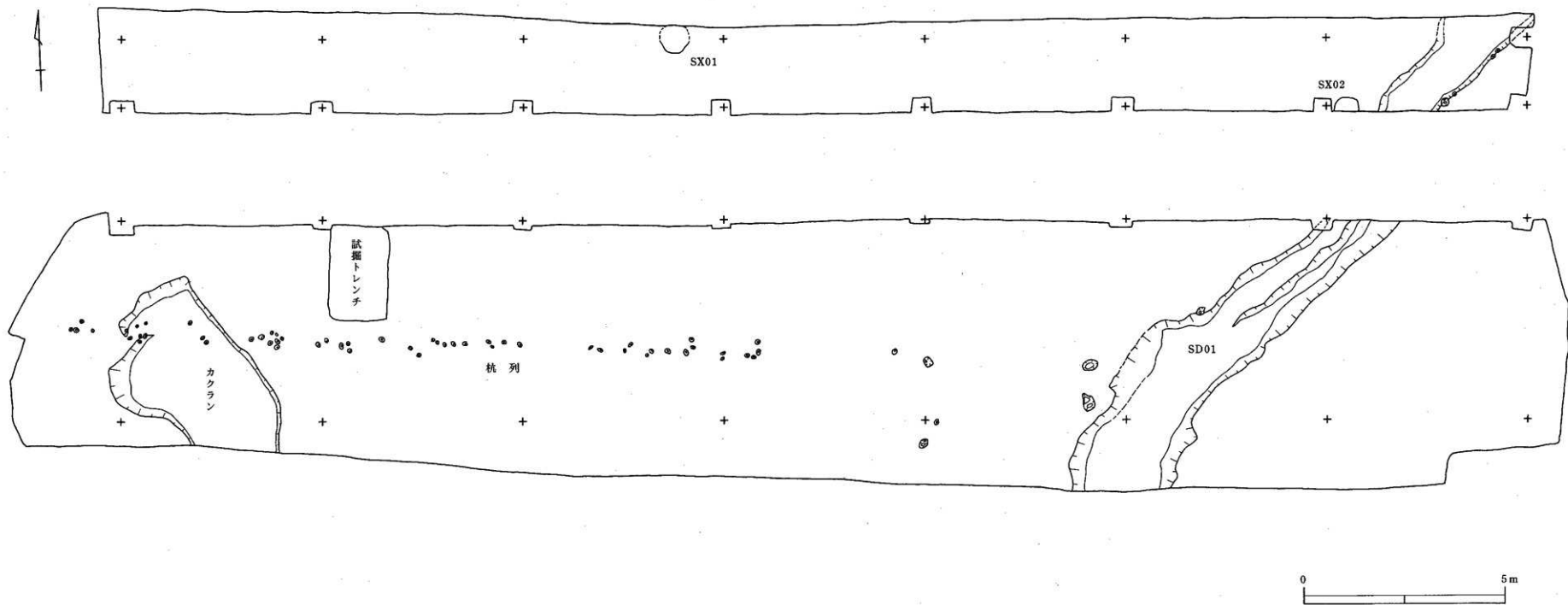
地表より50cm下、標高約2.7mまで掘り下げたところで、近世の遺構面に達した。近世の遺構としては、溝状遺構1(SD01)、近世墓1(SX01)、編竹製枠を伴った落ち込み1(SX02)、東西に伸びる杭列などを検出した。遺構は調査区の東側を中心として配置されている。

##### ・古代遺構

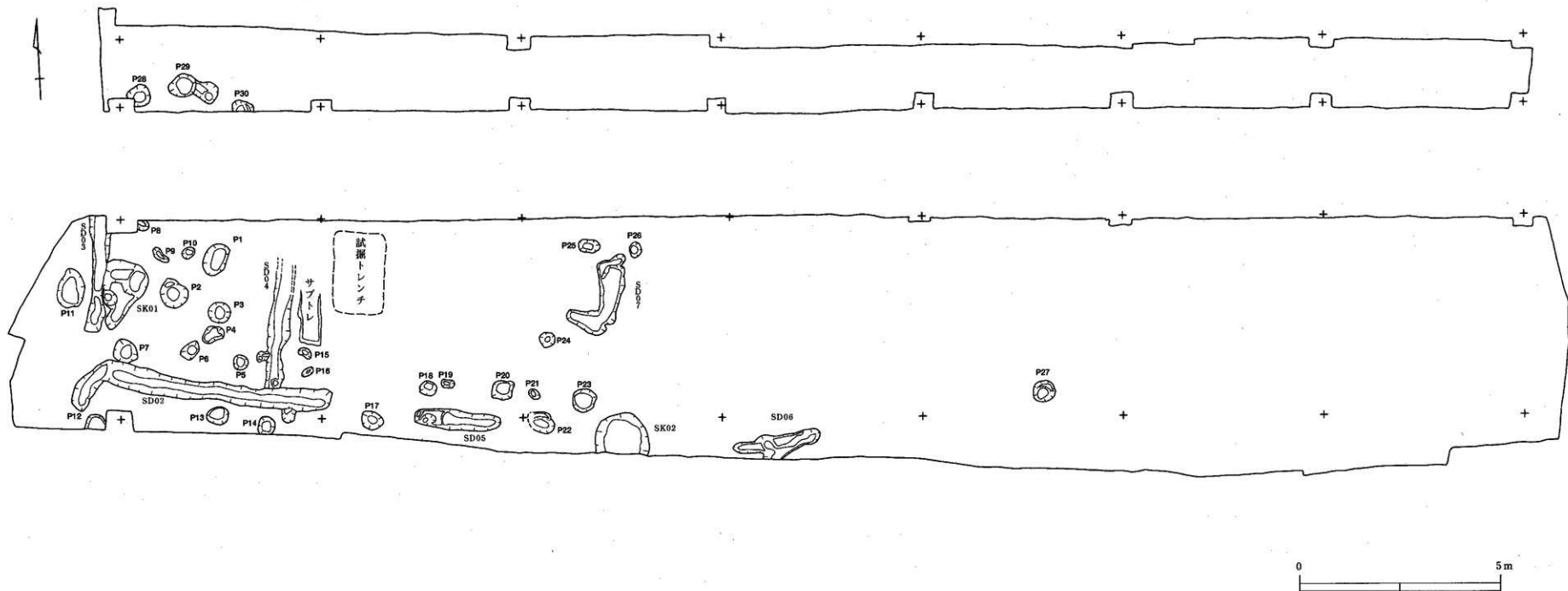
地表より90cm下、標高約2.3mまで掘り下げたところで、奈良時代～平安時代初期頃の遺構面に達した。古代の遺構としては、溝状遺構6(SD02～07)、落ち込み状遺構2(SK01～02)、ピット多数を検出した。建物として並ぶピットは確認できなかったが、SD02～04は方形に区画するように配置されていた。遺構は調査区の南西側を中心として配置されており、調査区のさらに南西へ遺跡の範囲は広がるものと考えられる。

#### <遺 物>

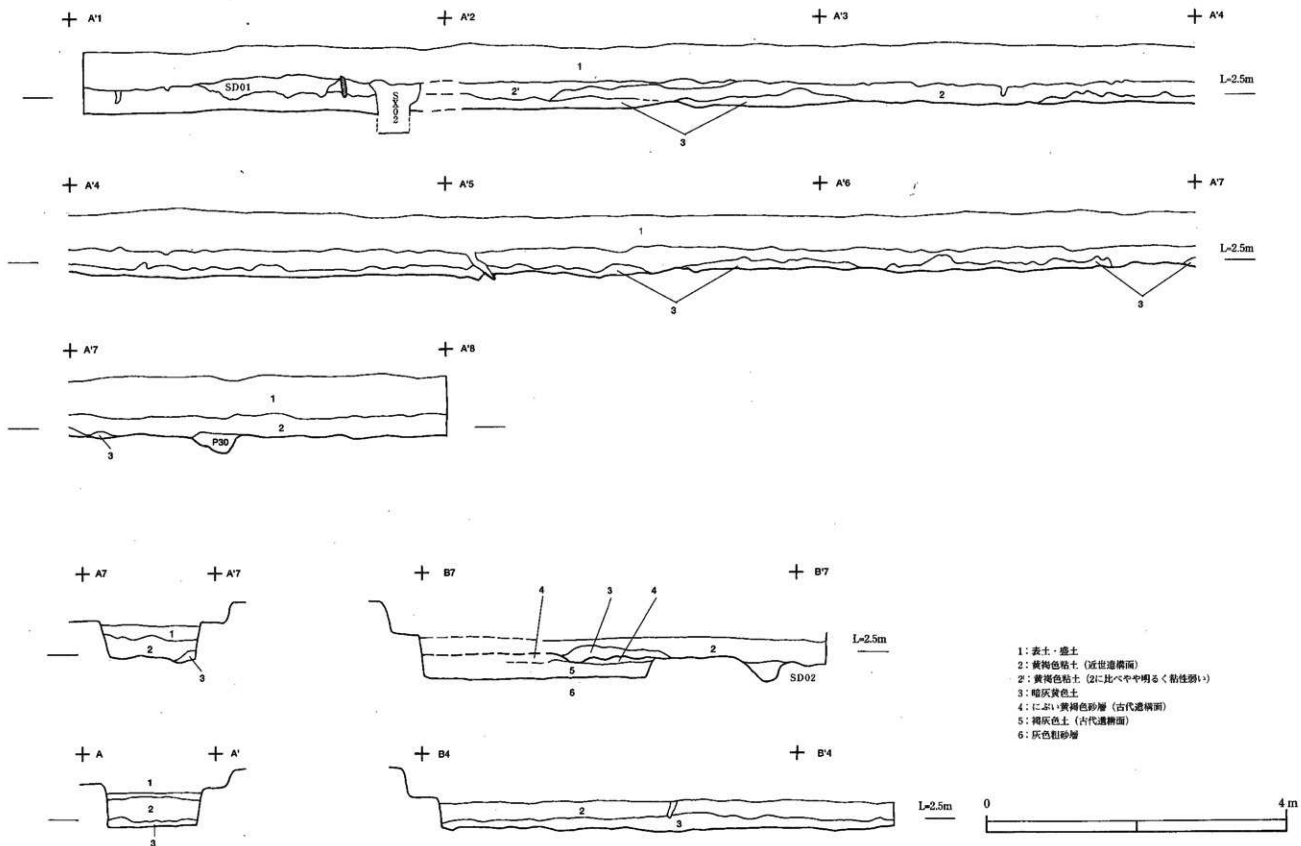
遺物としては、近世陶磁器、古銭、木器、奈良～平安時代の須恵器、土師器、若干の中世土師器などが出土している。特に奈良時代の須恵器、土師器は大量に出土しており、かなり多くの人々が、当時この周辺に暮らしていたであろうことが推測される。



第4図 近世遺構面遺構配置図



第5図 古代遺構面遺構配置図



第6図 調査区土層堆積状況

## 第4章 遺構と遺物

### (1) 近世の遺構と遺物

#### 杭 列

〈遺 構〉 南側調査区のほぼ中央を東西に走る小ビット群で、杭列と考えられるものである。ビットの径は6cmから15cm、残存する深さ6cmから25cm程度の規模である。総計55基の小ビット群からなる。埋土中には木屑が混ざった状態で確認されている。

ビット内からの遺物は確認されていない。明治期以降の水田に伴う施設であろうか。

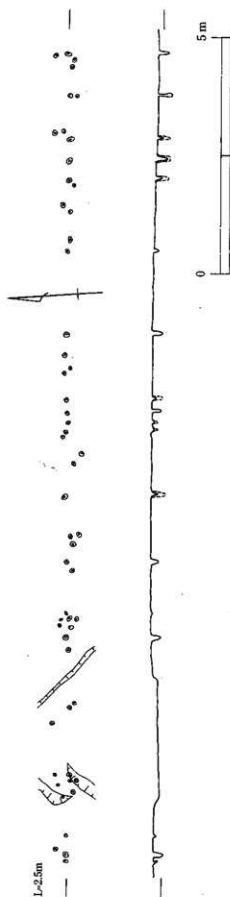
#### SD01

〈遺 構〉 北側、南側調査区にまたがって、調査区東側で検出した北東-南西方向へ伸びる溝である。幅約1.3m~2.5m、長さ14m以上、残存する深さは約20cmを測る。形状は直線的ではなく、ゆるやかに蛇行している。西岸の一部では段状になっている箇所があり、その部分で遺物がまともって確認された。また、溝の中及び外縁の数箇所です杭が数本検出されている。

〈出土遺物〉 遺物としては陶磁器、石製品などが出土している。

1は土師質の土器である。高く、裾に向かって広がる高台を有する。高台端部は先細りになっている。

2~5は陶器である。2は陶胎染付の椀で、体部の大半を失っていて染め付けの内容は不明であるが、風景のような模様が描かれている。高台は端部平坦面が不明瞭である。3は皿である。高台は低く、端部平坦面の幅が広い。乳白色の胎土で、内面と

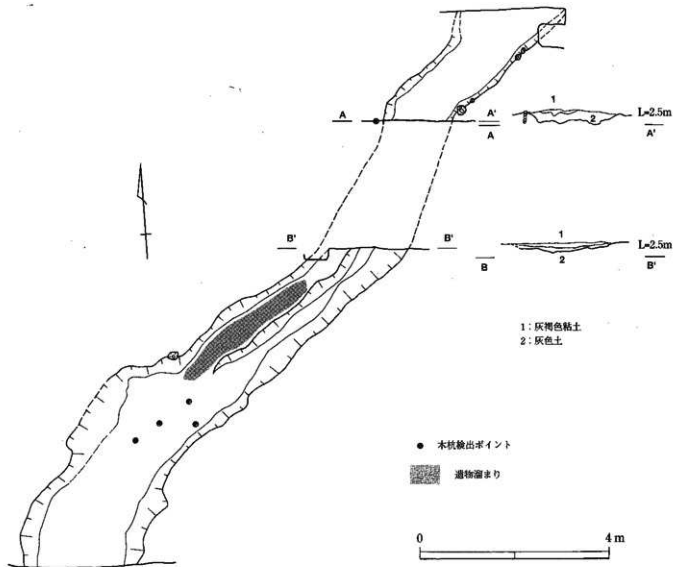


第7図 杭列発掘図

外面の一部に淡緑色の釉がかかる。蛇の目釉剥ぎである。4は鉢である。赤褐色の胎土で、内面と外面残存部の一部に暗茶褐色の釉がかかる。端部に広い平坦面を持った高台を持ち、高台周辺部にはケズリが施される。5は孔の穿たれた蓋である。頂部にはつまみが着いていた形跡があるが、欠損しているためその形状は不明である。橙白色の胎土で、透明の釉がかかる。上面には木のある風景が描かれている。

6～8は磁器である。6は白磁の皿である。底面及び外面には植物の絵が描かれ、内面底には十字花を配する。7は緑色の釉がかかった青磁で、低く内湾する高台を持つ。高台端部は大部分が欠けているが、残存部分からやや波打った形状の端部であったと推測される。やや焼きが悪く、断面灰色である。8は仏飯具（仏壇に供える容器）である。低端部外面は上方に向けて広がる面を持ち、底面外周にわずかな底上げの段が確認される。

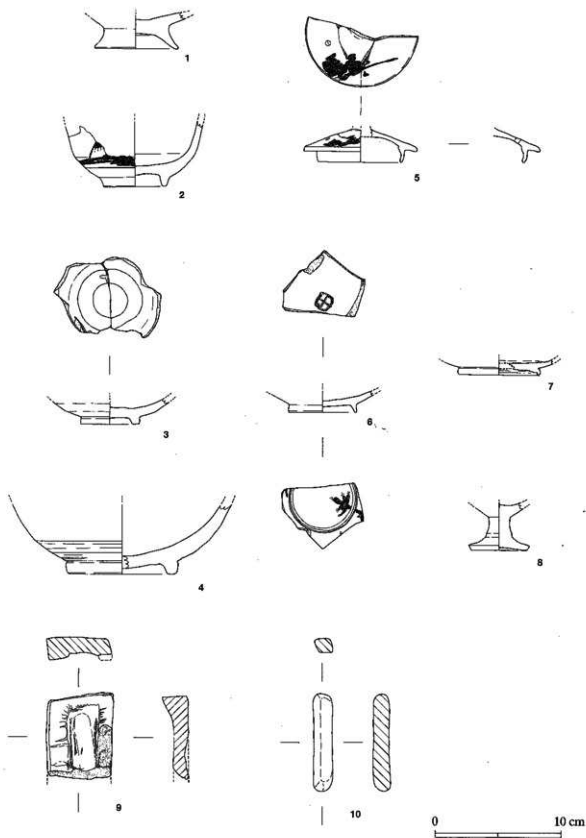
9～10は石製品である。9は硯である。1/3から1/2が欠損した本来長方形の形状のものと考えられる。海と陸は不明瞭であるが、捺痕が残る。泥岩製のものである。10は断面菱形の棒状の石製



第8図 SD01実測図



品であり、光沢のある黒色でガラス質の石材で造られている。用途については不明である。  
 陶胎染付碗や仏飯具などの形態から、時期はおよそ18世紀頃を中心とするものと考えられよう。



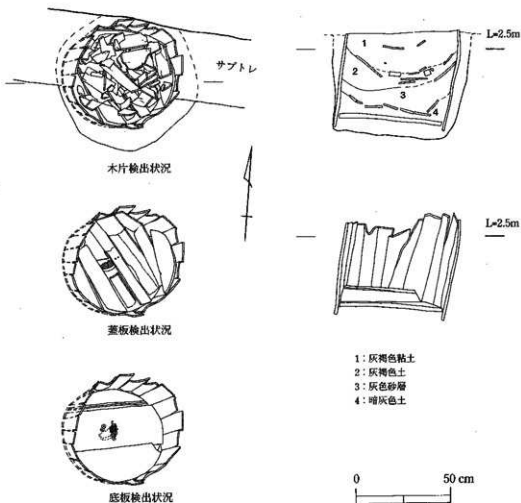
第9図 SD01遺物実測図

SX01

〈遺構〉 北側調査区中央部で検出した近世墓で、直径60cm、高さ55cm以上の棺桶である。掘形は直径約70cm、残存 深さ約60cmを測る。棺桶は外板22枚、蓋板3枚（7枚に割れているが、中3枚・外各2枚は本来各1枚のもの）、底板3枚の木板によって構成されており、外板を3ヶ所以上、竹製のタガによって固定している。蓋板、底板については、3枚の板の接触部が数ヶ所木釘によって接続されていた。蓋板を構成する中央の板には、その中心に小さな穴が2つ並んで開いていた。この穴に蓋の付属部品が接続していた可能性があるが、蓋板上面からはそれに該当するような木材等は確認されなかったので、紐を通して把手状にしたのではないとも考えられる。検出した時の状況は、外板は最上部まで残っていなかった。また、蓋板が土圧により上から押し潰されたようになっており、蓋板の上に多くの木片が密集して出土した。

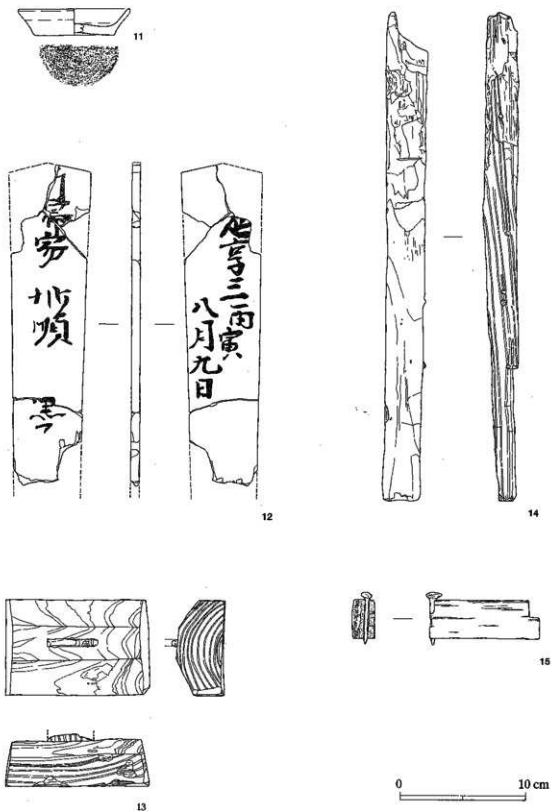
〈出土遺物〉 遺物としては、蓋板の上よりかわらけ、卒塔婆片、用途不明木製品、木板片等が出土し、蓋板の下より古銭、木製櫛、数珠が出土している。

11はかわらけである。底部回転糸切りで、口縁内外面には丁寧なヨコナデを、底部内面にはナデを施す。12は卒塔婆の破片と思われるもので、文字も残存している。文字の内容は次のようなものである。表「□□宗 妙順 □□」裏「延享三 丙寅 八月九日」延享三年は西暦で1746年

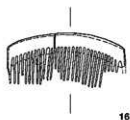


第10図 SX01実測図

にあたるものである。13は横断が底面の広い六角形、縦断が長方形に近い台形となる木製品で、上面に細い板が差し込んである。板の上部は欠損しているが、その形状から木製の位牌の台部等



第11図 SX01 蓋板上層出土遺物実測図

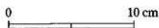


16

16



17



19

20

21

22

23

24

25



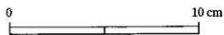
26

27

28

29

30



31



32



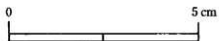
33



34



35



第12图 SX01底板上面出土遺物実測図

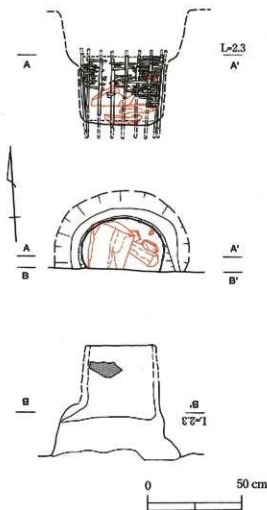
の可能性も考えられる。しかしながら、正確な形状・用途は不明である。14~15は棒状の木材の一部である。14は木釘を差し込むほぞ穴が数カ所開いており、15は鉄釘が打ち込まれている。16~17は木製の櫛である。握り部分が最も厚く、歯に向かって細く尖る。歯の付け根はV字状を呈する。18は鉄製の細い板をU字状に折り曲げたものである。毛抜きかとも思われるが、16の櫛を挟んだ状態で出土しており、櫛に付属するものであるかもしれない。19~30は木製数珠の珠である。確認できたものは12点であるが、本来はさらに多くの珠があったと思われる。31~35は古銭で、いずれも寛永通宝である。35のみは裏面に「元」の文字が確認される。古銭は六道銭として供えられたものと考えられる。遺物の時期は卒塔婆に記された1746年頃のものとして矛盾はない。

## SX02

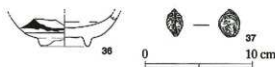
<遺構> 北側調査区の東側で、SD01の西岸付近に検出された遺構である。高さ48cmの垂直方向の細い竹に、下から約10cm以上の位置に竹ひごを水平方向に細かく編んだ製品を枠とした、深さ約55cmの落ち込み状遺構である。堀形は直径約65cm、深さ約55cmを測る。また、竹枠のある堀形の上面25cm付近以下からはその堀形の径は竹枠の直径に近い47cm程度になる。

竹枠の直径は約43cmを測り、下部10cmほど（水平方向の竹ひごが無い部分）は地面に直接突き刺したものである。竹製品は非常に脆くなっており、確認した次の日にはその大部分が崩壊していたため、図化できたのはその残存部のみであるが、検出当初の状況を略測の結果からできる限り破線で図上復元した。底には20~30cm大の石を不規則に置かれている。遺構の用途、性格については不明である。

<出土遺物> 遺物としては、陶器片、梅の種が出土している。36は陶胎染め付けの椀である。体部の大部分が欠損しているため、絵柄の内容は不明である。高台は端部平坦面が不明瞭である。37は梅の種である。これらの遺物は遺構の底面や置石からは浮いた状態で出土し



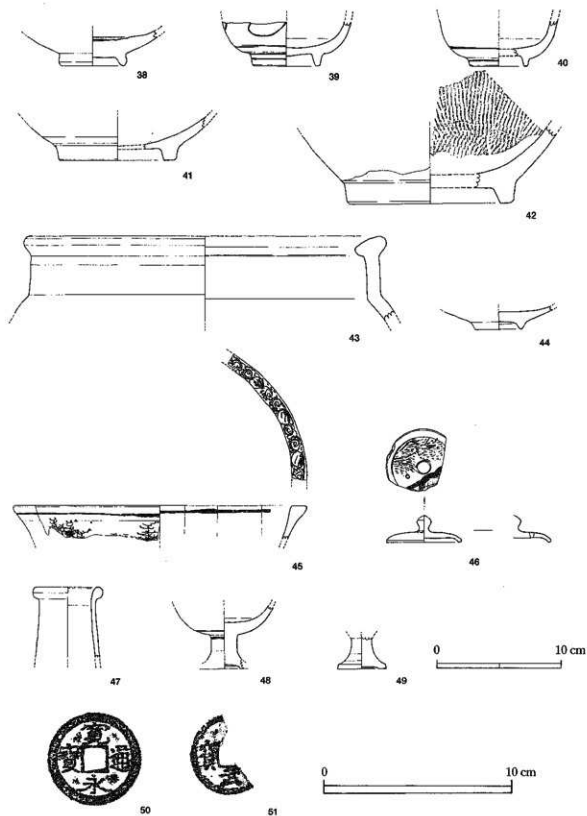
第13図 SX02実測図



第14図 SX02遺物実測図

ており、この遺構が埋まった、もしくは埋められた過程で混入したものと考えられる。

遺物の時期は18世紀頃と考えられる。



第15図 遺構外遺物実測図 (近世)

## 遺構外遺物

近世の遺物包含層は削平を受けており、遺構面上層からは近現代の遺物、古代土器細片と混在した状態で近世遺物が出土している。ここではそのうちの近世遺物を紹介する。

38は土師質の皿で、外面は底まで全体に煤が付着している。底内面は半径2～3cmの部分がかぼんでいる。高台は端部平坦面が不明瞭である。

39～43は陶器である。39～40は陶胎染め付けの碗である。高台は端部に明瞭な平坦面を持たない。いずれも高台外面とその少し上方に線が描かれており、39にはその他の図柄もあることがわかるが、内容は判別できなかった。41は鉢で、内面は白化粧土の上に刷毛目を施す。胎土は灰色で暗茶褐色の釉がかかる。高台端部平坦面は2条の沈線状に窪んでいる。42は擂鉢で、9本1単位の条線を施す。黄褐色の胎土で、暗茶褐色の釉がかかる。高台は広い平坦面を持つ。43は甕で、口縁端部がT字状を呈する。赤褐色の胎土で、暗茶褐色の釉がかかる。

44～49は磁器である。44は皿で、内面に蛇の目釉剥ぎが見られる。断面は白色だが、釉のかからない底面付近外面と釉剥ぎ部分表面は淡橙色である。高台は低く、端部に向けて先細りとなる。45は白磁の鉢で、外面には木々の絵柄が、口縁上面にも文様が描かれている。口縁上面の文様は菊水もしくは唐草の一種であろうか。46は白磁の蓋である。孔が穿たれ、頂部にはつまみが付く。上面には稲薄のような絵柄が描かれている。47は細首の白磁瓶である。口縁端部が外面に肥厚する。48～49は仏飯具である。いずれも低端部外面は上方に向けて広がる面を持ち、底面外周に底上げの段が明瞭に確認され、49では低端部外面が下方に向けて広がる面を持つことも確認される。

11～12は古銭である。50は寛永通宝で、51は洪武通宝と推定されるものである。

洪武通宝は初鋳年代が1368年の渡来銭であるが、総じて遺物の時期は17～18世紀頃を中心としたものであろう。

## 参考文献

- 財団法人鳥取県教育文化財団 1996「米子城跡6-3・3・7号米子駅境港線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 大橋康二 1994「古伊万里の紋様」理工学社
- 大塚初重他 1994「八百八町の考古学」山川出版社

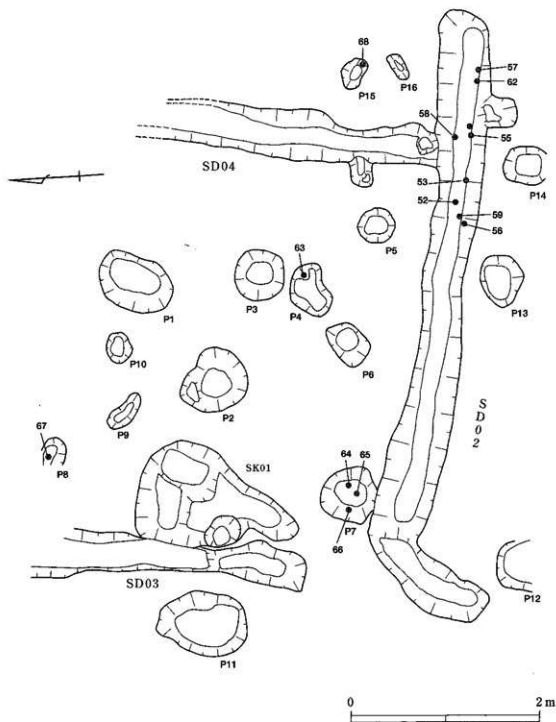
※ 陶器・磁器の時期については、一部を鳥根県教育委員会の西尾克己氏と守岡正司氏に御教示いただいた。

石材鑑定については、羽木伸幸（出雲市文化振興課臨時職員）が行なった。

## (II) 古代の遺構と遺物

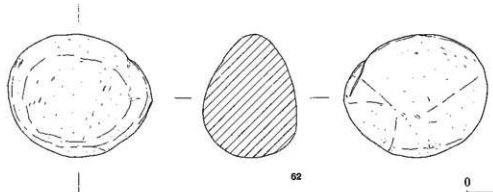
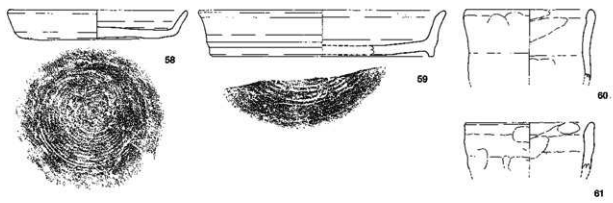
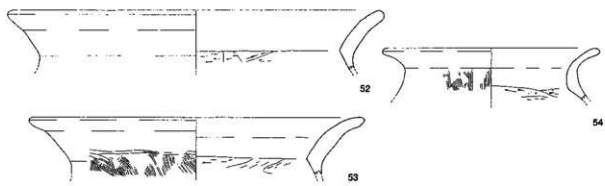
### SD02・03・04 (区画溝)

〈遺 構〉 南側調査区の西側において、溝状遺構SD02・03・04がそれぞれ南、西、東にコの字状に配置された状態で検出された。西側のSD03は北側端部が南側調査区の外へ続いている。北側調査区においてはその続きが確認されず、南側調査区と北側調査区の間で溝が途切れていることが確認される。東側のSD04は、北端に明瞭な立ち上がり等確認されず、本来は



第16図 区画溝周辺遺構実測図





第17图 SD02 遺物実測図

更に続いてきたものと推定される。溝配置の形状を考えると、南側調査区と北側調査区の間にもう1本東西に走る溝があった可能性も考慮すべきであろう。そうであるならば、方形に配置された溝状遺構ということになる。コの字状、方形状いずれの配置であるにせよ、これらの溝は一定区域を区画するためのものと考えられるもので、溝の内側に他区域よりかなり多い密度でピットが集中している。並びが確認できるピットは確認できなかったが、建物跡があった可能性もある。また、区画の南西側隅においては一部溝が切れている。区画内への出入り口であろうか。それぞれの溝及び区画内範囲の数値は次のとおりである。

南辺にあたるSD02は長さ約6.7m、幅約50cm、深さ約20cmを測り、3本の溝状遺構の中で最も深いものである。西端1.2mの部分は南西方向に屈曲し、深さも10cm以下となる。

西辺にあたるSD03は長さ2.9m以上、幅50cm、深さ10cmを測り、北側調査区北壁へ続く。南端1mの部分で深さ13cm程度までやや深くなる。

東辺にあたるSD04は残存長約3.8m、幅約50cm、深さ約10cmを測る。

区画の内法は東西で約4.2mを測る。また、北側にも溝があるとすれば、南北内法は4m以上と推定される。

〈出土遺物〉 SD02の出土遺物として、須恵器、土師器、製塩土器、丸石が確認されている。

52～54は土師器甕の口縁部である。大形のもの(52)(53)と小形のもの(54)がある。体部内面にはケズリが施され、53、54には体部外面のハケメも確認される。55～57は須恵器の環である。いずれも口縁が内湾し、端部で屈曲するもので、底面の残る55、56では回転糸切りが確認される。58は須恵器の皿である。口縁はやや外反ぎみに立ち上がり、丸くおさまる。底面に回転糸切りが確認される。59は須恵器の盤である。口縁は垂直ぎみに立ち上がり、端部付近でやや外反する。高台は低く、底部外縁部付近に接続する。底面には糸切りが確認される。60～61は製塩土器の口縁部である。いずれも砲弾形の形状のものと推測される。布目痕は確認されない。62は砂岩質の丸石で、加工痕、使用痕等は確認されない。

その他、SD03から若干の須恵器、土師器細片が出土している。

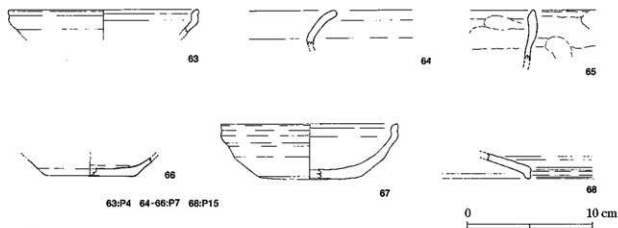
## SK01

〈遺構〉 区画溝内にあって、SD03を切って掘られている、三角形に近い不整形な形状の土壇である。南北約1.75m、東西で最も広がる部分約1.1m、最も深い部分の深さ約15cmを測る。遺物は確認されていない。

## P1～P16(区画溝周辺ピット群)

〈遺構〉 区画溝周辺には大小16基のピットが密集している。P1～P10は区画内のピットであり、P11～P16は溝の外周沿いに配置されるピットである。これらのピットで規則的な並びを確認できるものは無い。

〈出土遺物〉 区画溝周辺のピットからは、P4、P7、P8、P15より遺物が出土している。いずれも小片である。



第18図 区画溝周辺遺構遺物実測図

63はP4から出土した須恵器環の口縁の破片である。口縁端部が内湾し、端部で屈曲する。

64~66はP7より出土した須恵器、土師器片である。64は土師器壺の口縁部、65は製塩土師の口縁部である。66は須恵器環の底部と思われるもので、糸切り後ナデが確認される。

67はP8より出土した須恵器環である。口縁は内湾し、底部は静止糸切り後ナデを施している。

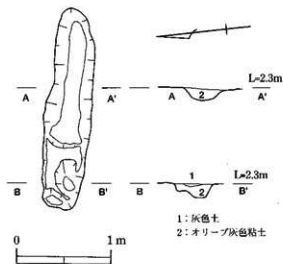
68はP15より出土した須恵器蓋の端部である。端部は屈曲して下垂しており、外面にもシャープな面を作る。

#### SD05

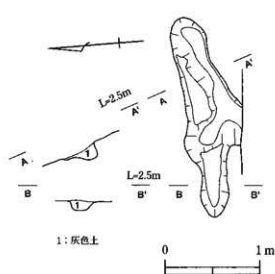
〈遺構〉 南側調査区にあって、SD02から約2m東に離れた場所にある、東西方向に伸びる溝状遺構である。この溝はSD02と伸びている方向、軸がほぼ同一なものとなっている。長さ2.1m、幅約50cm、深さは深い所で約13cmである。遺物は土師器細片が確認されるのみである。

#### SD06

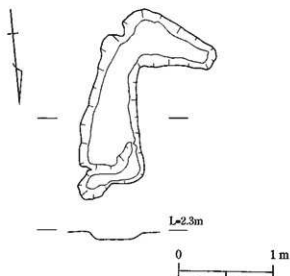
〈遺構〉 南側調査区にあって、SD05からさらに5.8m東に離れた場所にある、東西方向に伸びる溝状遺構である。一部調査区の外へ出ているため不明確であるが、溝の中ほどさらに南西方向に向けて溝が分岐しているようである。溝の分岐点は溝の西端から約1mほどの



第19図 SD05実測図



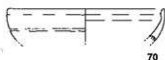
第20図 SD06 実測図



第21図 SD07 実測図



第22図 SD06 遺物実測図



第23図 SD07 遺物実測図



部分である。長さ2.2m、幅38~26cm、深さは深い所で約10cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物としては、薄手の甕もしくは壺の頸部(69)が確認されている。外面にはハケメ調整が、体部内面にはケズリが施されている。

### SD07

〈遺構〉 南側調査区にあって、SD04から東に約7mの位置にある逆L字状の溝である。基本的に南北方向へ伸び、南端において西方へ屈曲する。南北方向約1.9m、東西方向約1mで、幅は70~35cm程度、深さは深い所で約12cmを測る。

〈出土遺物〉 遺物として須恵器片が確認されている。70は須恵器杯の口縁部で、口縁部が内湾するものであるが、端部の屈曲は不明瞭である。71は須恵器蓋端部である。端部は短く下方つまみ出し、外面に鈍い面を作る。

## SK02

〈遺構〉 南側調査区にあって、SD05とSD06の間に位置する落ち込み状遺構である。落ち込みの南側は調査区外へ続いている。東西約1.3m、南北1m以上、深さ約20cmを測る。遺物としては、若干の丹塗り土師器細片が出土している。

### その他のピット

〈遺構〉 以上に述べてきた遺構の他に、多数のピットが検出されている。南側調査区に確認されるものは、P17～P27であり、その内P27以外は皆調査区の西側に分布している。北側調査区に確認されるものは、P28～P31であり、それらは皆調査区の南西端に分布している。いずれも建物として並ぶものは確認できなかった。深さはいずれも10～15cm程度の浅いもので、灰色土単層の埋土である。

〈出土遺物〉 以上のピットでは、P23、P25より若干の土器片が確認されている。

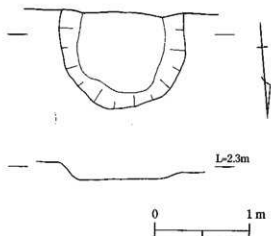
72は、P23より出土した土師器甕の口縁である。口縁は直線的で、端部が丸くおさまる。体部内面にはケズリが確認できる。

73は、P25より出土した須恵器皿の破片である。口縁は短く、端部に平坦面を持つ。

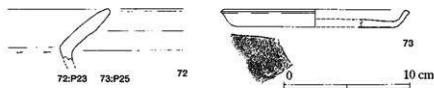
### 遺構外遺物

遺構外より出土した古代の遺物は、須恵器、土師器、製塩土器、土唾などが確認されている。その多くが細片であったが、量としては土師器・須恵器合わせて約75kg以上、10㎡あたり2.5kgもの量が確認された。

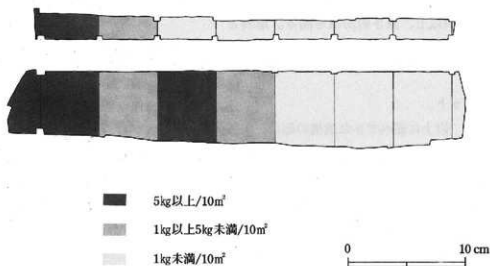
重量で出土量を示すことは必ずしもその実状を正確に表わすものではないが、一応の目安として10㎡あたりの出土遺物の重量をグリッドごとに表示したものが第26図である。この図を見ても分かるように、遺物の出土分布状況は調査区の南西側に偏っており、遺構の分布状況とほぼ一致している。



第24図 SK02実測図



第25図 その他のピット遺物実測図



第26図 遺構外遺物出土状況

a. 須恵器

<須恵器蓋>

74~94は須恵器の蓋である。

74~79は天井部に輪状つまみの付くものである。74、76は天井部がやや高く、丸みを帯びている。

75、78~79は偏平で、天井部に平坦面を持つ。74、75、79では下方へ屈曲する口縁部が確認される。

80~85は宝珠状つまみの付くものである。いずれも偏平な形状で、天井部に平坦部を持つ。80では良く突出した宝珠状つまみが見られ、81では偏平な宝珠状つまみが見られる。また、85以外は天井部から口縁部にかけて外反ぎみに下がる。82~84では端部を短く下方へつまみ出す口縁部が確認され、85では下方へ屈曲する口縁部が確認される。また、7は乳白色で焼きの悪い須恵器である。

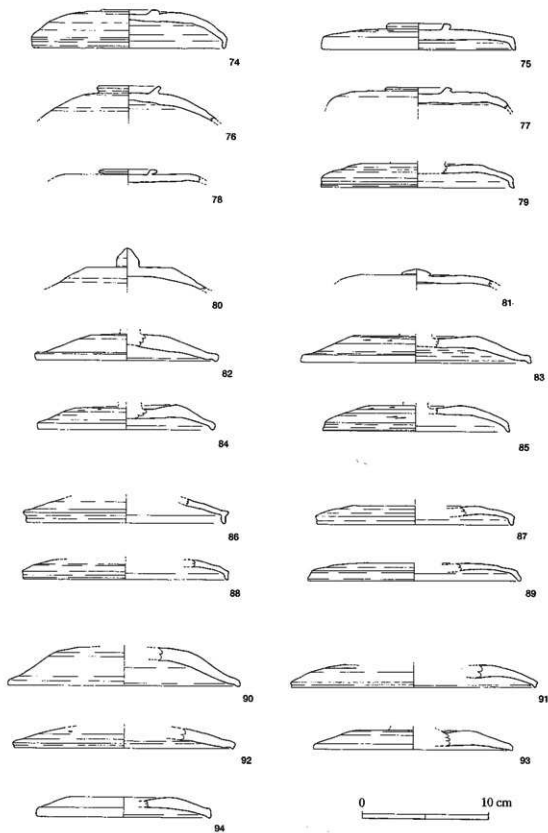
86~89は下方へ屈曲する口縁部、90~94は端部を短く下方へつまみ出す口縁部である。そのほとんどが偏平な形状のものと思われるが、90ではやや高い丸みを帯びた天井部が確認される。

90、92~94は天井部から口縁部にかけて外反ぎみに下がる。

<須恵器坏>

95~142は須恵器の坏である。

95~133は高台を持たず、体部が丸みを帯びてやや内湾するものである。底部は基本的に回転糸切り未調整のものであるが、123、125、126、129、133では、糸切り後ナデ調整を行っているようである。口縁端部は短く外方へ屈曲するもの(95~105、114~121)と屈曲の明瞭でないもの(106~113、122~133)がある。傾向として口縁端部屈曲の明瞭なものに糸切り未調整のものが



第27圖 遺構外遺物実測図(須恵器1)

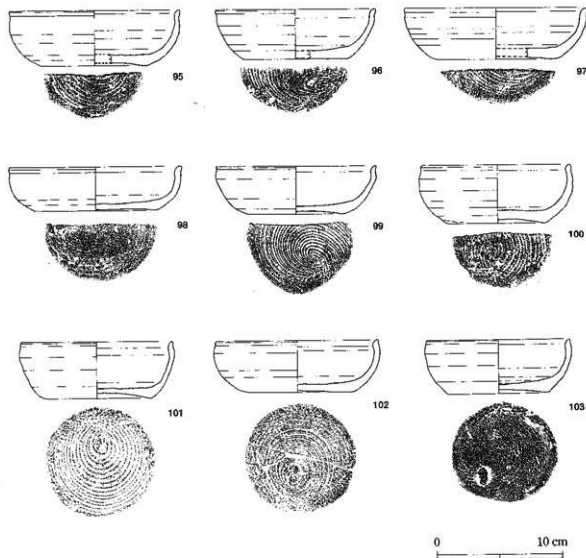
多く、不明瞭なものに糸切り後ナデを施すものが多い。底部は多くが接地面に対して窪んだ形態を呈する。また、101、125では「×」のへら記号が、123では「※」のへら記号が確認される。また、116は橙色の焼きの悪い須恵器である。

134~142は高台を持つものである。134~137は口縁部が直線的に立ち上がり、低い高台が底部に付くものである。138もおそらく同様な形態のものと思われるが、他の個体に比べ器壁が薄く、やや内側に高台が付く。139~142はやや高い高台を持つ底部で、底部から口縁にかけて丸みを帯びてゆるやかに立ち上がるようである。139には内面に漆が残存部全面に付着している。底部は、134、137でへら削りの痕跡が、136、140~142でナデ調整が確認される。また、136は底部に断続的な短い線を繋げた円形状の傷が確認される。

<須恵器皿・盤>

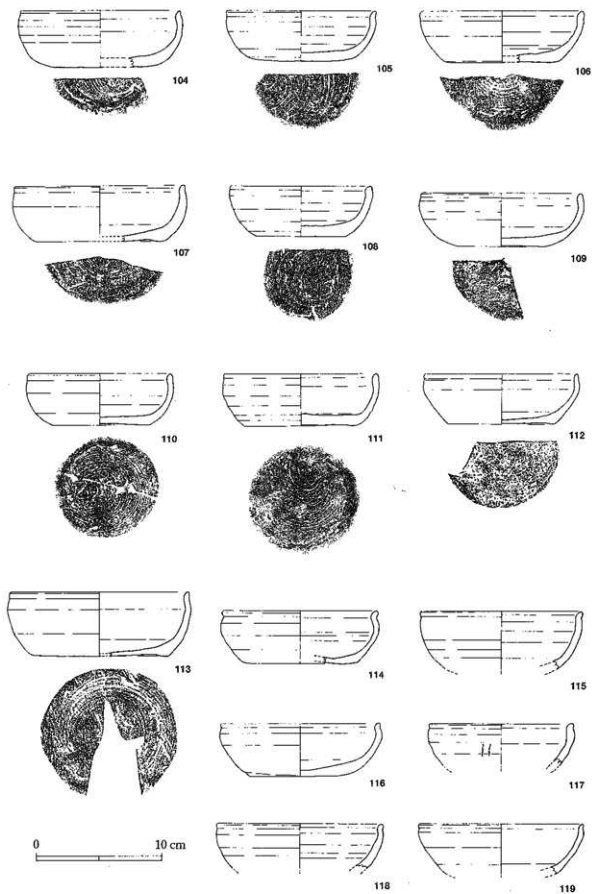
143~155は須恵器の皿・盤である。

143~150は高台を持たないものである。底部には回転糸切りが確認される。143~145は底部か

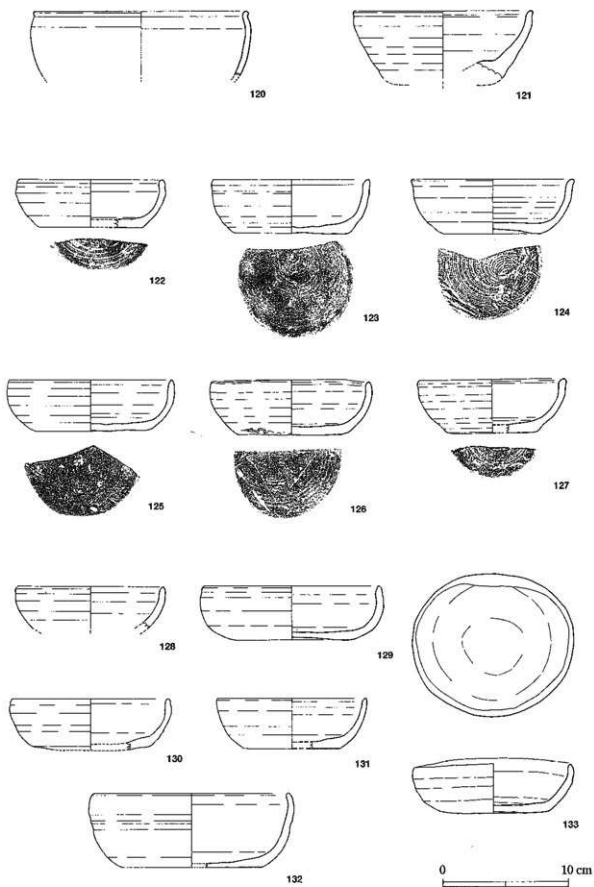


第28図 遺構外遺物実測図（須恵器2）

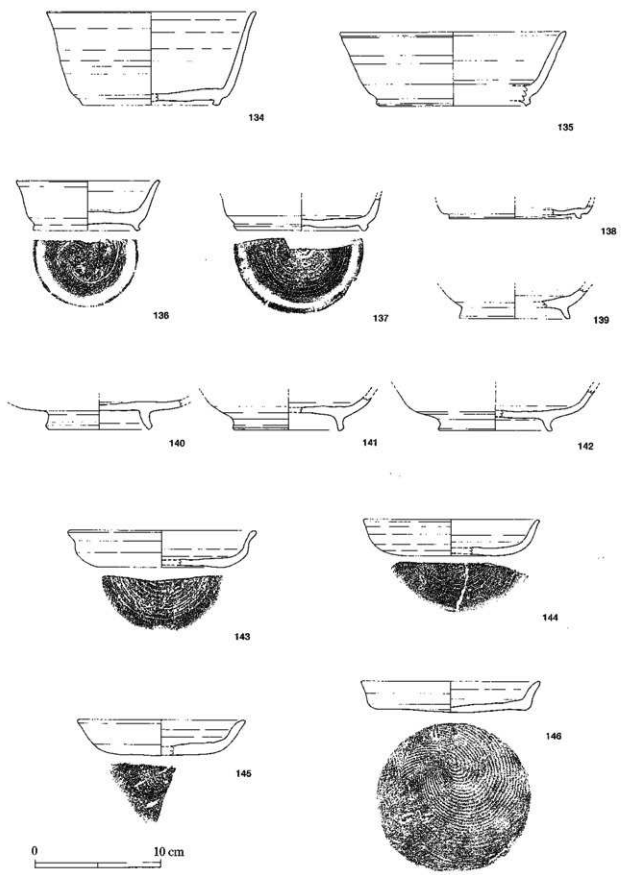




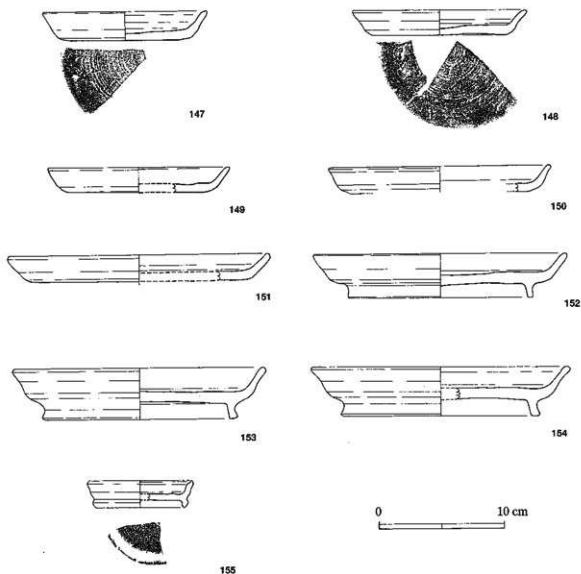
第29図 遺構外遺物実測図(須恵器3)



第30圖 遺構外遺物実測図（須恵器4）



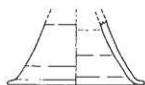
第31圖 遺構外遺物実測図 (須恵器 5)



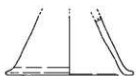
第32図 遺構外遺物実測図(須恵器6)

ら口縁にかけて丸みを帯びてゆるやかに立ち上がるものである。143では端部が外方へ屈曲し、肥厚しているが、144、145ではやや外反ぎみに立ち上がるのみである。146～151は底部と口縁の境が比較的明瞭なもので、口縁は直線的もしくはやや外反ぎみに立ち上がる。

152～155は高台を持つものである。底部には基本的にナデ調整が確認されるが、155にはヘラ削りかと思われる砂粒の動きが観察される。152では、直線的な口縁の立ち上りが確認され、153、154では端部がやや肥厚し、やや外反する口縁が確認される。いずれも高台は底部外縁よりやや内側に接続する。155は復元口縁径8.2cmと非常に小型の特殊なものである。口縁端部は内面に段を持ってやや内湾ぎみに納まり、先端はかなりシャープである。高台は底部外縁に付き、端部は下方に尖っている。



156



157



158



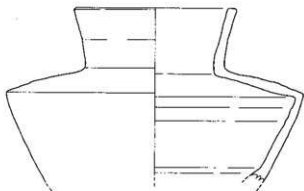
159



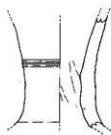
160



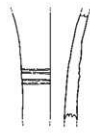
第33图 遺構外遺物実測図(須恵器7)



161



162



163



165



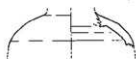
166



168



169



164



167



第34图 遺構外遺物実測図(須恵器8)

<須恵器高坏>

第156～160は須恵器の高坏と推定されるものである。

156、157は端部が外方に屈曲し、坏部に向かって直線的に立ち上がる脚部である。器壁は4～6mmと薄手のものである。

158～160は端部に平坦な面を有し、坏部に向かってゆるやかに立ち上がる脚部である。器壁は5～8mmと厚手のものである。4ではスカシの痕跡が確認される。スカシの形状は残存部がわずかであるため定かではないが、円形かと推定される。

<須恵器壺>

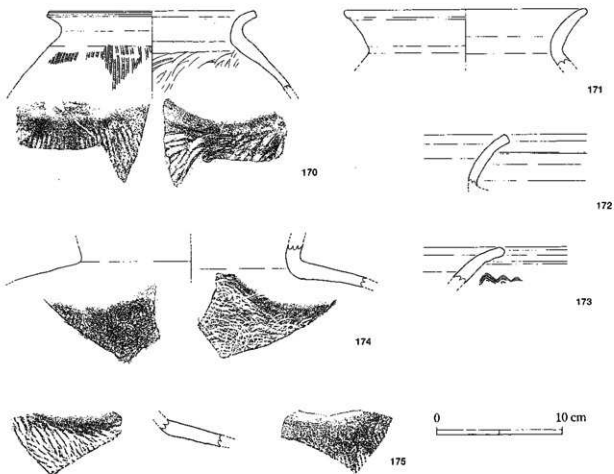
161～169は須恵器の壺である。

161は肩部が鋭角に屈曲し、口縁がやや外傾して立ち上がる灰釉須恵器の壺である。口縁端部は上面に平坦部を持つ。頸部、肩部共に幅広の形態を呈する。底部は残存していないが、残存部下端で器壁が急に肥厚しており、底部が残存部下端から近い所にあることを窺わせる。

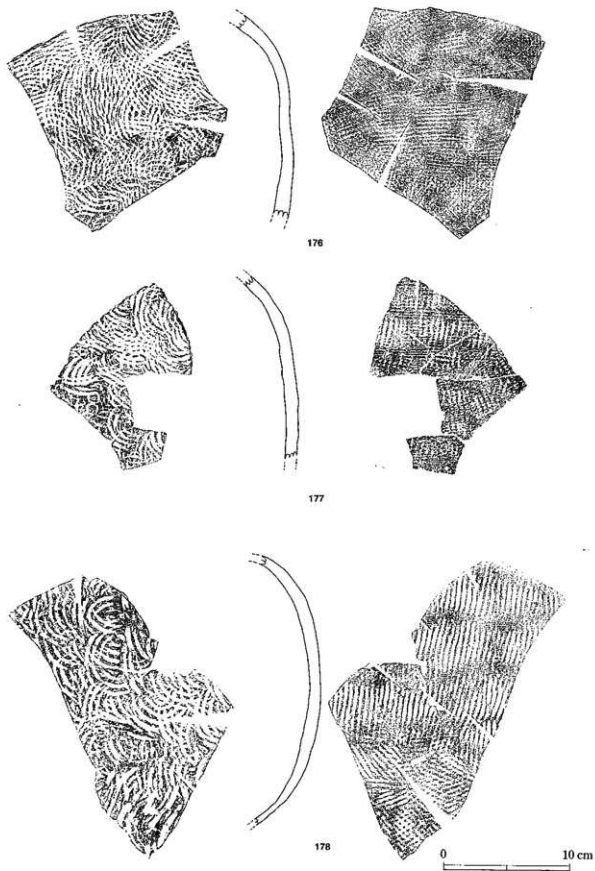
162、163は長頸壺の口頸部である。口縁端へ向かってゆるやかに外傾し、2条の沈線が施される。

164は比較的小型で薄手の頸部から肩部付近の破片である。肩部はゆるやかに下垂し、頸部は細い。

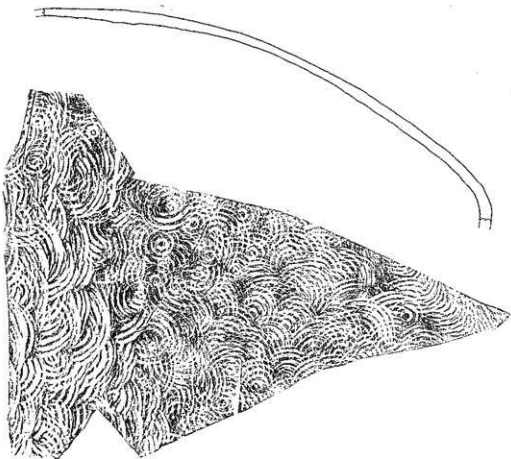
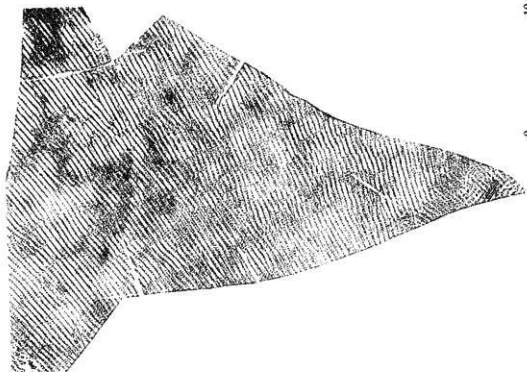
165～167は体部から底部にかけての破片である。いずれも丸みのある形態を呈している。



第35図 遺構外遺物実測図(須恵器9)



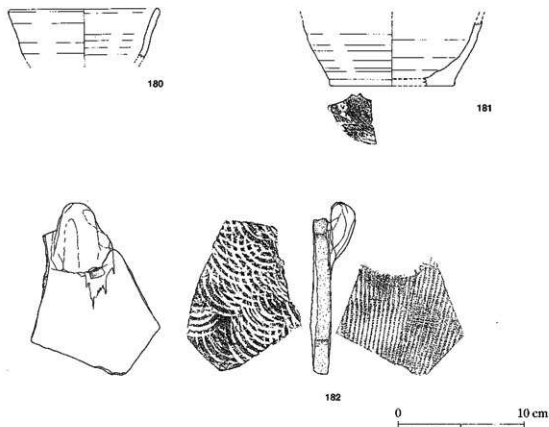
第36圖 遺構外遺物実測図 (須惠器10)



178

第37圖 遼南小灣神案圖(須臾器11)





第38図 遺構外遺物実測図（須恵器12）

165、166は高台を持たないもので、底部には165に静止糸切りが、166に回転糸切りが施される。また、165の肩部には1条の沈線が、166の底面には「×」のヘラ記号が確認される。167は高台を持つもので、底面に「|」のヘラ記号が確認される。

168、169は短頸壺の一種で、いずれも小型のものである。168には高台が確認され、角張った肩部と極端に短く広い口縁が特徴的である。169は168よりもさらに小型で、最大径6.5cm、器高3cm余りである。肩部がやや丸みを帯び、高台も無い。口縁付近の形態は7と同様の特徴を呈する。

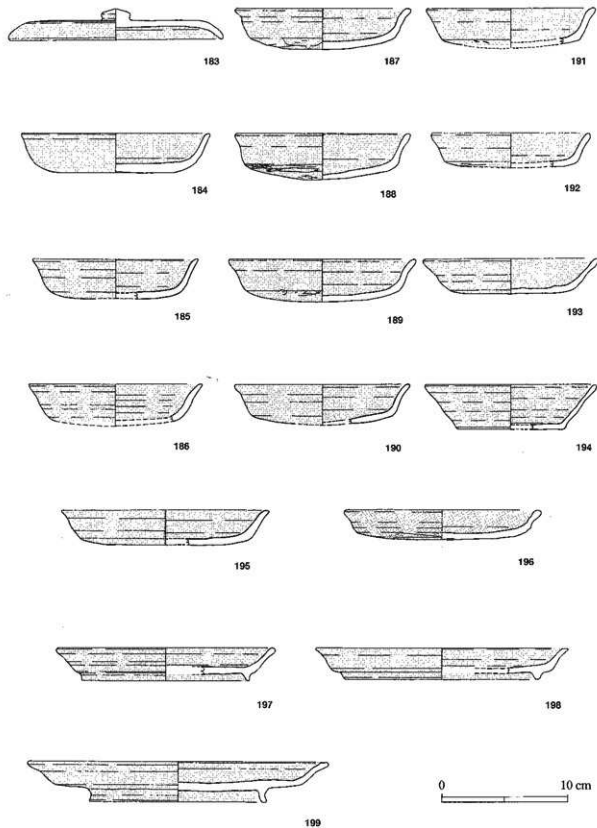
〈須恵器甕・大型壺〉

170～179は須恵器の甕・大型壺である。

170は口縁部から体部にかけての破片である。170は短い口縁が大きく外反し、端部に面を持つ。端部の面には沈線状のくぼみが確認される。体部外面には平行タキキ痕が、内面には同心円タキキ痕が残る。

171～172は口縁から頸部にかけての破片である。いずれも170に比して長い口縁で、外反する角度もやや緩やかである。端部は171で丸くおさまり、172では面を持つ。いずれも端部のやや下方に1条の沈線が確認される。

173は口縁端部付近の破片である。端部は丸くおさまり、やはり端部のやや下方に1条の沈線が確認されるが、この個体では沈線のさらに下方に4本以上の条線からなる波状紋も確認される。沈線を境にやや大きく外反している。



第39圖 遠構外遺物実測図(土師器1)

174、175は頸部から体部にかけての破片である。174は頸部付近が大きく肥厚しているが、175で頸部の肥厚は明瞭でない。いずれも外面に平行タタキ痕が、内面に同心円タタキ痕が残る。

176~179は体部の破片である。全て外面に平行タタキ痕が、内面に同心円タタキ痕が残る。176~178では外面にタタキ後カキメ調整も施されており、特に176ではかなり密なカキメが確認される。

#### <その他の須恵器>

180~182は以上に分類した他の器種、もしくはその可能性のある須恵器である。

180は器種不明の口縁部であるが、その形状から坏もしくは鉢の類であろうか。181は壺もしくは鉢の底部と推測されるものである。底部には糸切り痕が残り、内面には粗く強いナデが施される。182は甌の把手の部分と思われるもので、体部は外面に平行タタキ痕が、内面に同心円タタキ痕が残る。また、外面にはわずかにカキメ調整の跡も確認される。

#### b. 土師器

##### <土師器蓋>

183は土師器の蓋である。

天井部は広い平坦面に宝珠状つまみが付き、口縁部はやや内湾して単純におさまる。胎土の色調も淡橙色であるが、内外面に丹が塗られている。

##### <土師器坏>

184~194は土師器の坏である。

確認される個体は全て高台を持たず、内外面に丹が塗られている。

184は、底部と口縁の境がやや不明瞭な、平底に近い形態のものである。口縁はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部で若干外反する。

185~192は底部に施されるケズリによって底部と口縁部の境に緩みができるもので、底部が丸底になっているものである。口縁は端部のやや下方に屈曲部を持ち、外反する。

193、194は底部と口縁部の境が明瞭で、平底になっているものである。いずれも口縁は直線的に立ち上がり、底部押圧技法が施される。193では底部外縁部にケズリの痕跡が確認される。194は他の個体に比べ口縁が長く、深い形態である。

##### <土師器皿・盤>

195~199土師器の皿・盤である。いずれも内外面に丹が塗られている。

195、196は高台を持たないものである。基本的に坏で多く確認された形態に見られる、底部ケズリ、丸底、口縁の屈曲という特徴を持つ。坏の底部が広がっただけの形態である。ただし、196は、口縁端部が極端に肥厚して外反する特徴も見られる。

195~199は高台を持つものである。197は底部外縁付近に高台が付き、口縁部は短く直線的に立ち上がる。口縁端部はやや肥厚する。198は底部外縁のやや内側に高台が付き、口縁部が短く外反して立ち上がる。199は復元口径24.8cmの大型のものである。底部外縁のかなり内側にやや高めの高台を持ち、口縁は低く長く、屈曲部を持つ。口縁端部は内面に沈線状の段を有する。

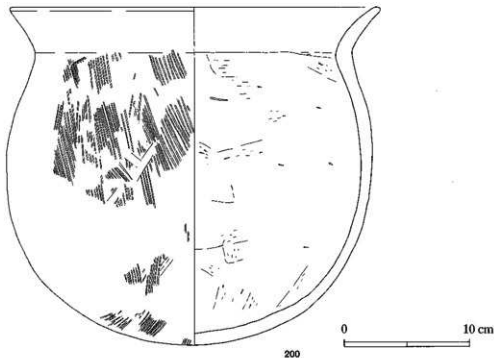
### 〈土師器甕〉

200～218は土師器の甕である。

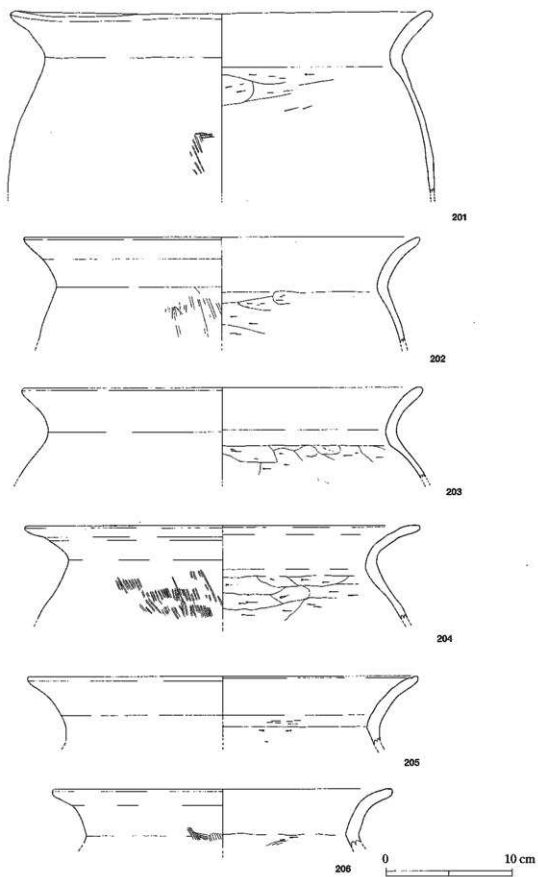
200～212は頸部の屈曲が大きく、体部がやや膨らむ形態のものである。大型のものから小型のものまで大きさは様々である。口縁は直線的もしくは外反して立ち上がり、端部を単純に丸く納めるものが大半であるが、212は他と口縁の形状が異なり、端部が大きく肥厚している。体部は外面にハケメが、内面にケズリが施され、器壁は厚いまもの（200、207、209）と非常に薄く仕上げるもの（201～204）がある。いずれもあまり肩の張らない形態である。底部まで形状が観察できる資料は200のみであるが、この個体では、ほぼ球形に近い体部の形態が確認される。胎土、色調は黄白色の比較的粒子の細かいものが多いが、黒褐色～橙褐色で粒子の粗いもの（202、203、207～210）もある。

213～216は口縁が大きく外反し、頸部の屈曲がはっきりしているもので、体部があまり膨らまないと考えられるものである。基本的に体部外面にハケメを施し、内面にケズリを施すものと思われるが、頸部付近にもハケメを施すものが多い。胎土、色調はいずれも黄白色の比較的粒子の細かいものである。

217、218は口縁が比較的高く立ち上がり、頸部の屈曲が非常に鈍いもので、体部もあまり膨らまないと考えられるものである。口縁部はいずれも先細りの形状を呈し、端部でやや外反する。体部外面にハケメを施し、内面にはケズリを施す。胎土、色調はいずれも黄白色の比較的粒子の細かいものである。



第40図 遺構外遺物実測図（土師器2）



第41図 遺構外遺物実測図(土師器3)



207



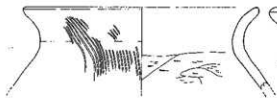
210



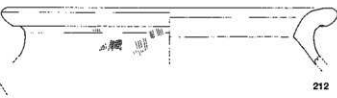
208



211



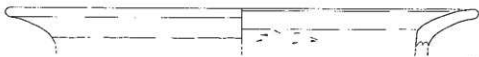
209



212



213



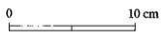
214



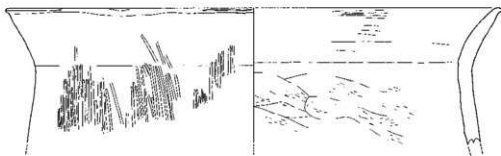
215



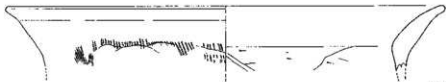
216



第42図 遺構外遺物実測図(土師器4)



217



218

0 10 cm

第43図 遺構外遺物実測図（土師器5）

#### <製塩土器>

219～223は製塩土器の破片である。

口縁端部の形状は単純なものが多いが、219のように内湾ぎみに納めるものもある。219～222ではいずれの胴体でも布目痕は確認できず、内外面に細かい指頭圧痕が残る。223は小片であるが布目が確認される。図化できなかった製塩土器片も多くあるが、布目痕の残る資料はこの1片のみであった。復元径13.8cmのものから9.6cmのものまである。これらは六連式と呼ばれる焼塩土器で、砲弾状の形態を呈するものである。市内出土の製塩土器はほとんどがこの六連式のものであるが、その特徴の1つである内面の布目痕の残るものはほとんど報告されておらず、確実なものとしては223の資料が唯一である。

#### <土 鍾>

224～225は土鍾である。

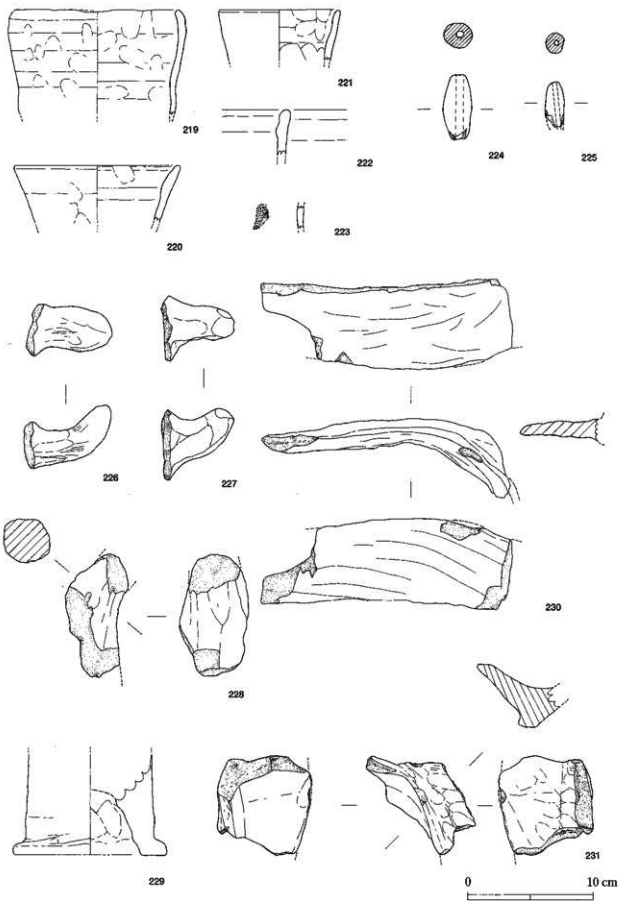
出土した土鍾は図化した2点のみであり、いずれも管状土鍾である。形状はやや膨らみを持つ細長い紡錘形のもので、大きさにはばらつきがあるようである。

#### <土製品>

226、227は甕等の把手部分と考えられるものである。

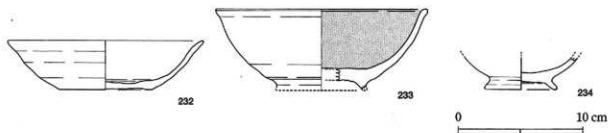
228、229は土製支脚である。228は腕部付け根付近の破片である。表面にナデの跡が顕著に残り、火を受けている。229は脚部の破片である。底面はドーム状にくぼみ、端部は外面に向け肥厚する。

230、231は甕の底部分の破片である。内外面に顕著なナデが認められる。



第44圖 遺構外遺物実測図 (土師器 6)





第45図 遺構外遺物実測図（土師器7）

<中世土師器>

232～233は中世土師器である。

232は高台を持たないもので、口縁は大きく開きながら内湾ぎみに立ち上がり、端部でやや外反する。底部は比較的広い。233は高台を持つもので、黒色土器である。内面のみ黒色化した内黒土器と呼ばれるものである。口縁は内湾して立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。高台部分は風化欠損しているが、それほど高いものではないようである。内外面調整は風化により不明瞭であるが、内面横方向ミガキ、外面ヨコナデがわずかに観察できる。234は低く裾に向けて大きく広がる高台周辺部の破片である。胎土はいずれも黄白色で非常に密なものである。

これらの中世土師器はいずれもA1、A2グリッドから出土したものである。11～12世紀頃のものであろうか。

参考文献

- ・ 武田恭彰「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」『古代吉備』第14集
- ・ 島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書』
- ・ 中村 浩 1990『須恵器』
- ・ 奈良国立文化財研究所『中城宮発掘調査Ⅶ』
- ・ 出雲市教育委員会 1996『上長浜貝塚』
- ・ 近藤義郎編 1994『日本土器製塩研究』
- ・ 八峠 興 1998『山陰における中世土師器の変遷について』『中近世土器の基礎的研究』

## 第5章 ま と め

### 1. 遺跡の時期について

今回の調査地においては、18世紀の棺桶(SX01)及び、それとほぼ同時期のSD01、SX02などが検出された近世の遺構面がまず確認された。この近世遺構面より下層からは、若干の中世土師器(11～12世紀頃)なども確認されているものの、ほとんどの遺物は奈良時代～平安時代初期(7世紀末～9世紀前半頃)のものであった。中でも8世紀中葉～後葉頃の土器は非常に多く確認された。この包含層下の遺構面は、遺構内より確認される遺物も全て奈良時代～平安時代初期のものと考えられるものであった。これより古い時期の遺物については、小片1片すらも確認されておらず、これより下層からも遺構・遺物共に全く確認されていない。

当地が生活空間として確実に利用された最初の時期は7世紀末～8世紀前半頃のことと考えられ、その後1世紀前後の間継続して利用されていたようである。しかしながら、その後しばらくの間生活の痕跡は途絶えてしまう。中世にも付近には生活空間があったようであるが、当地に再び人々の生活の痕跡が見られるようになるのは10世紀近く後の18世紀になってからである。調査地は現在も水田地帯となっているが、過去においても安定した生活空間としてはあまり適した場所ではなかったのであろう。

### 2. 遺跡の範囲について

従来考えられていた高浜Ⅱ遺跡の範囲は、今回調査地の東に向かって広がっているものと考えられていた。しかしながら、調査地の東側では古代の遺構はほとんど確認されず、西側に集中して確認された。少なくとも遺跡の範囲がさらに西方へ広がっていることは確実である。調査地より北東方向約350mに位置し、高浜Ⅱ遺跡に隣接する里方八石原遺跡でもやはり従来考えられていたよりも西方に遺跡の中心がある可能性が示されており、これらの遺跡群は一連のものとして北東～南西方向へ帯状に長く伸びているものではないだろうか。今後の遺跡保護のためにも、こうした遺跡範囲の確認も今後の課題として残される。

### 3. 遺跡の性格について

#### a. 近世

近世の遺構としては、先にも述べたように、SX01、SX02、SD01などがある。これらの遺構ではいずれも18世紀頃の遺物が確認されており、全て一連のものであるかもしれない。遺構の中で最も性格の把握しやすいものはSX01の棺桶墓であるので、この遺構を中心に検討する。

通常、江戸時代の成人用の棺桶は縦横60cm程度のものが一般的で、当遺跡で検出したものも、この例に漏れない。いわゆる屈葬という形で埋葬されていたものと考えられる。副葬品には、櫛、不明鉄器(櫛の付属品もしくは毛抜きか)、数珠、銭貨が確認されている。この中の銭貨は、「六道銭」と呼ばれる、死出の旅へ出る人に、三途の川の渡し賃として持たせたものである。通常六道銭は6文1組の銭を持たせるものであるが、ここでは5枚の寛永通宝しか確認されなかった。また、櫛が2枚確認されているが、これについては、一般的に女性の墓に納められる副葬品のよ

うである。また、数珠も江戸時代の棺桶によく納められている副葬品の一つである。棺桶埋土上より確認された遺物については、木片多数、塔婆片、かわらけが確認されている。その内、木片については、木製の位牌の一部かと思われるものもあるが、その他の木片は、板状のものが多いものの、形状に統一性が無く、一連の構造物等とは考えにくい。塔婆片については、「延享三丙寅（1746）八月九日」の記年の他、「妙順」という戒名なども記されている。以上のようなことから、当遺跡で確認した棺桶は、1746年に埋葬された一般的な成人女性の墓であろうと推定される。

このような墓が調査区外にもあったものかどうかは定かではないが、北方に広がる集団墓である可能性は考えられる。周辺の遺構もこれに関連するものであろうか。

#### b. 古代

高浜Ⅱ遺跡の存在する出雲市平野町は、奈良時代の出雲国出雲郡伊努郷の西端近くにあると考えられる地域である。西は出雲大社のある杵築郷に、南は当時西流していた出雲大川（現在の斐伊川）に隣接していたと考えられる。

天平5年（西暦733年）に編纂された『出雲国風土記』には伊努郷について、「伊努郷。郡家の正北八里七十二步なり。国引き坐しし意美豆努命の御子、赤衾伊努意保須美比古佐委気能命の社、即ち郷の中に坐せり。故、伊農と云ふ。〔神亀三年に、字を伊努と改む。〕」とあり、郷庁の位置と郷名の由来について記されている。ここに記される伊努郷の郷庁は、伊努郷の東よりに位置するものと考えられ、隣接郷の杵築郷郷庁には現在の出雲大社付近が推定されている。高浜Ⅱ遺跡の周辺には、現在まで公的施設などの存在は文献からも遺跡からも現在まで確認されていない。

今回の高浜Ⅱ遺跡における発掘調査では、墨書・へら書き土器などは確認されなかったものの、丹塗りの土師器の他、日常土器とは考え難いミニチュア土器（155、169）、小型短頸壺（168）、漆の付着した須恵器（139）などが確認されており、単なる一般集落とは異なるものである可能性が示された。時期的にも律令制度の確立に相前後するように生活が営まれ始めている。しかしながら、遺構からそうした性格を窺い知り得るものは検出されず、現段階では推測の域を出ない。

調査区より北東約300mの位置で平成4年度に調査された里方八石原遺跡では、古代の遺構は確認されなかったものの、奈良時代の土器が多く出土しており、高浜Ⅱ遺跡の時期とほぼ一致する。地表で確認される土器の散布状況を考慮しても、里方八石原遺跡は高浜Ⅱ遺跡と一連の遺跡と考えたほうが良いであろう。この里方八石原遺跡では、丹塗りの土師器の坏に水晶片と滓片が入れられた状態のものが確認されており、ここでも通常の集落とは異なる様相が垣間見える。

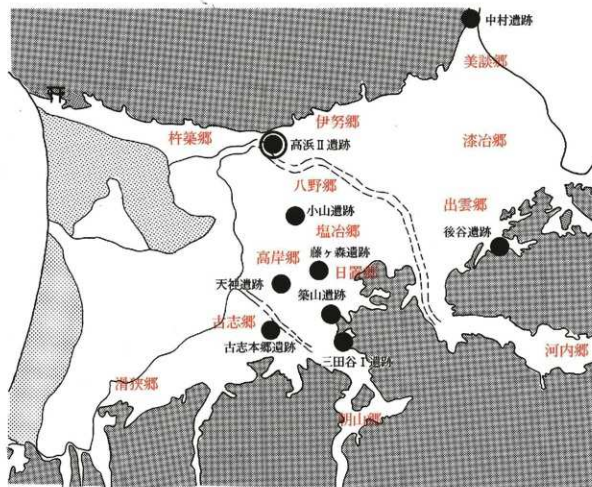
高浜Ⅱ遺跡・里方八石原遺跡の性格を考えるにあたっての資料は、未だ十分揃っているとは言えないが、里方八石原遺跡より出土した水晶片（未成品・加工品双方存在）と滓片の入れられた土師器や、高浜Ⅱ遺跡より出土した漆が付着した須恵器からは、多様な工房的性格も想像される。ただし、これらの遺物も遺構に伴ったものではないので、これ以上の言及はあえて避けておきたい。

出雲平野における官的施設等の想定される律令時代の遺跡（寺院を除く）としては、墨書土器やへら書き土器などを出土する、後谷遺跡（出雲郡家）・中村遺跡（美談郷庁か）・古志本郷遺跡（神門郡家）・三田谷Ⅰ遺跡・天神遺跡・築山遺跡（日置郷庁か）・藤ヶ森遺跡・小山遺跡

(八野郷庁か)がある。三田谷Ⅰ遺跡では「高岸神門」など神門郡各地の郷名が記された木簡も出土しており、明らかに郡家関連施設の遺跡と考えられるが、風土記には当該地における官的施設の記載はない。風土記に記載されている各郡における官的施設は郡家、郷庁、駅家等のみであるが、実際にはその関連施設や出先施設も各地に存在したのであろう。このような周辺官的施設の把握も当該期の出雲平野を解明する上で重要な問題である。

#### 参考文献

- ・出雲市教育委員会 1993『出雲市遺跡地図』
- ・大塚初重他 1994『八百八町の考古学』山川出版社
- ・加藤義成 1981『修訂出雲国風土記参究』今井書店
- ・出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲』
- ・出雲考古学研究会 1979『天神遺跡の諸問題 古代出雲を考えるⅠ』
- ・出雲市教育委員会 1998『藤ヶ森遺跡（Ⅰ地点・Ⅱ地点）発掘調査報告書』
- ・島根県教育委員会 1998『古志本郷遺跡現地説明会資料』
- ・斐川町教育委員会 1996『後谷Ⅴ遺跡』
- ・出雲市教育委員会 1998『里方八石原遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第8集



第46図 高浜Ⅱ遺跡と律令時代の周辺文字資料出土遺跡

# 圖 版



調査地近景  
(南より)

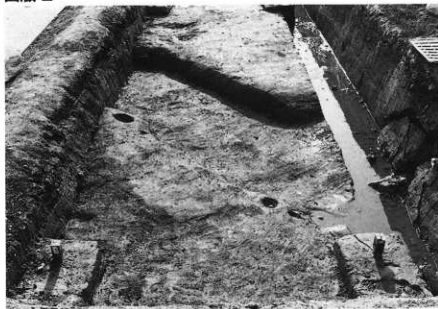


発掘状況  
(北側調査区西より)

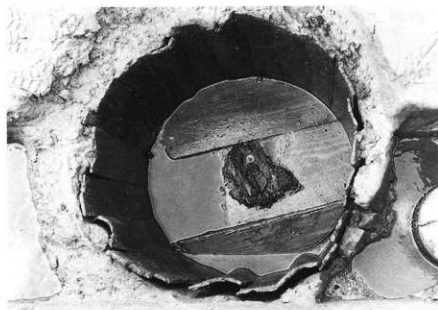


発掘状況  
(南側調査区西より)

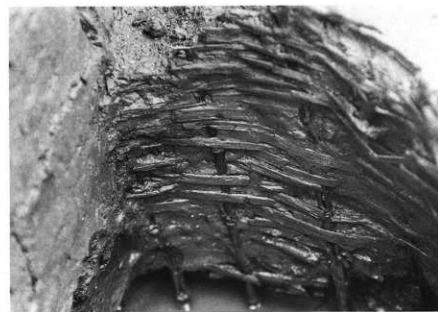
図版 2



SD01  
(北側調査区東より)



SX01



SX02



建物出土状況  
(B6GR南より)



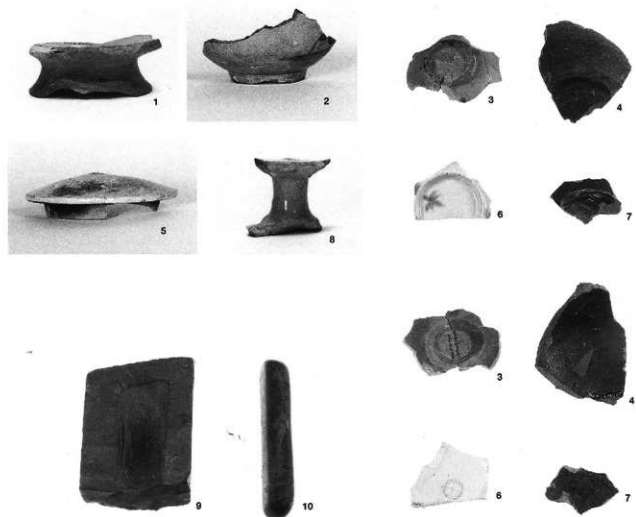
区画溝 (南より)



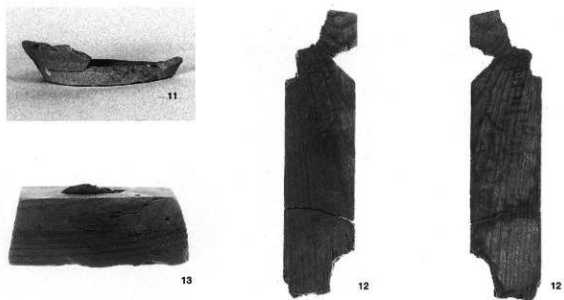
SD02



图版 4



SD01出土遺物



SX01出土遺物



14



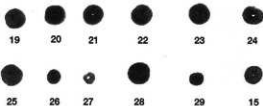
15



16



17



19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

15



31



32



33



31



32



33



34



35



34



35



18

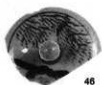
SX01出土遺物



36



39



40



46



48

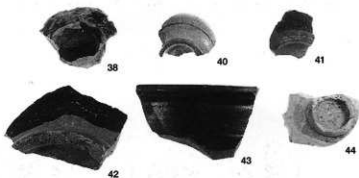


49



37

SX01出土遺物



38

40

41

42

43

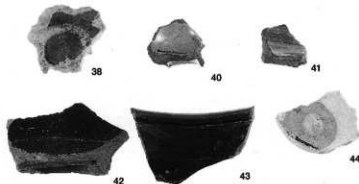
44



45



47



38

40

41

42

43

44



45



47



50



51

遺構外遺物



55



56



58



59



52



53



54



57



60



61



62

SD02出土遺物



63



64



65



67



66

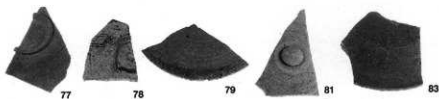


68

区画溝周辺ピット内出土遺物 (P4、P7、P8、P15)



SD06・その他ピット出土遺物



遺構外遺物



95



96



97



98



99



100



101



102



101



103



104



105





遺構外遺物



图版 12







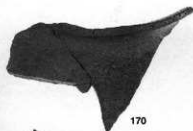
165



166



167



170



171



172



173



174



175



176



177



178



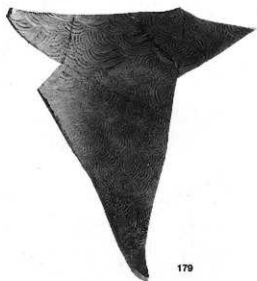
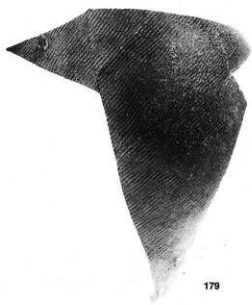
176



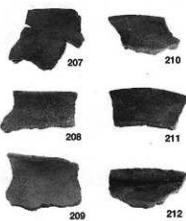
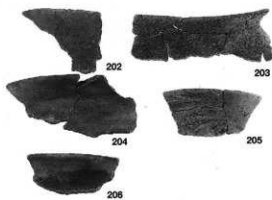
177

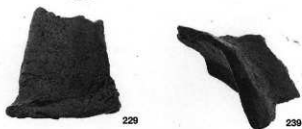
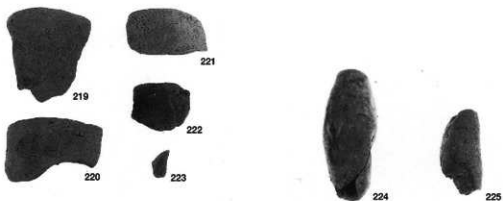


178



图版 16





高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 高 浜 II 遺 跡

平成11年(1999)3月発行

編集・発行 出雲市教育委員会  
出雲市今市町109番地1

印刷・製本 有限会社 加田印刷  
出雲市姫原町466-1